

西市民病院 月報

VOL278 阪神大震災特集



神戸市立西市民病院

目 次

震災前の職員の皆さんへ	院長 塩見文俊	1
記 録			
1.	平成7年兵庫県南部地震の概要	2
2.	当院の被災状況	4
3.	当日の西市民病院の記録	5
阪神大震災の記録		10
手記・阪神大震災		15
資料-関連新聞記事より		42
編集後記		46



00095064825

震災前の職員の皆さんへ

院長 塩見文俊

大震災から3カ月過ぎました。その間に病院を去られた方々、いかがお暮らしてでしょうか。新しい任地でご活躍のことと思いますが、あまりにも慌ただしい別れでゆっくり話ができなかったのが心残りです。先日、別れた若い先生に会う機会がありました。二人とも元通り、いやもっと明るく、挨拶に来てくれました。そして震災の強烈な印象も少し薄れ、得難い経験だった、と話してくれました。

さて、今回の月報は平成6年度のまとめであり、また大震災特集号となっておりますので、まず6年度末の挨拶を申し上げます。

5年間の新築・改築に並行した診療、あまり前例のない難事業でしたが、それぞれの持ち場で頑張ってもらって完成に近づいていたことに（結果はともあれ）感謝いたします。

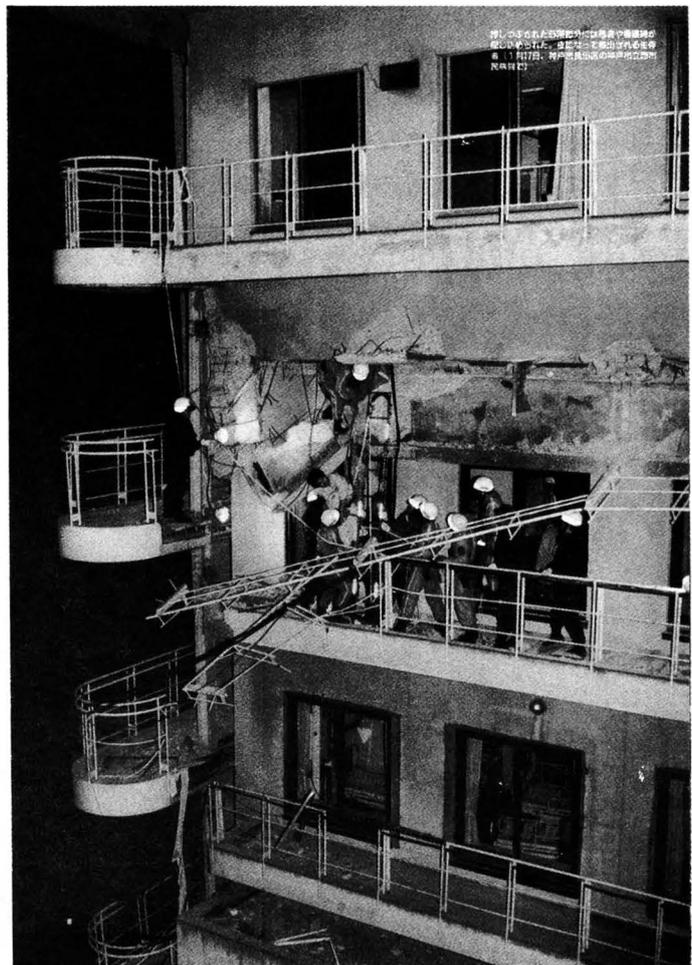
さて、思いもかけぬ大震災。入院患者から1名の犠牲者を出したことは、誠に残念ですが、職員の皆さんが無事だったことはせめてもの慰めです。

救急、救出、搬出、避難所廻り、移転と難問続きでしたが、なんとか少し落ち着いた今日この頃です。かなり無理を云って間借りした保健所の1フロアですが、夜間遠くからでも見える6階の灯は、被災者にとって心強い、と話してくれた人があります。

少ない人数になりましたが、一日、一日を大事に生き、働き、来年1月には被災前のメンバー一堂に会して尽きぬ話をしたいものです。

皆さんの手記は、おそらく空襲下の東山病院以来の貴重な記録と思います。どうか大切に保存して下さい。

どうぞお元気で。



押しつぶされた5階からの救出活動
朝日新聞社編「報道写真全記録」から

記 録

1. 平成7年兵庫県南部地震の概要

平成7年1月17日未明に阪神・淡路地域を襲った「兵庫県南部地震」は、日本で初めての近代的な大都市における直下型地震であり、大きな破壊力をもって、未曾有の被害をもたらした。

- (1) 発生日時 平成7年1月17日 午前5時46分
- (2) 震 源 淡路島（北緯34° 6′ 東経135° 0′）震源の深さ 約20km
- (3) 規 模 マグニチュード 7.2
- (4) 震 度 最大震度7
- (5) 特 徴 横揺れと縦揺れが同時に発生

（参 考）神戸市の被災状況等

震災は、多くの命を奪うとともに、都市基盤や建築物に甚大な被害を与え、市民に直接的な大被害を与えた。また、復旧の長期化に伴い、産業、都市機能、生活などに様々な間接的影響を及ぼしている。

(1) 市民生活の被害

① 多大な犠牲者

- ・死亡者 3,853人、不明1人、負傷者 14,679人(3/26現在)
- ・高齢者（60歳以上）が死亡率の52%
- ・家屋倒壊による死者多数

② 避 難

- ・避難人数 235,443人、避難箇所 601箇所（ピーク時）
- ・避難人数 99,986人（就寝者数57,551人）、避難箇所 434箇所(3/25現在)

③ 公共施設の甚大な被害

- ・市役所、病院等の重要公共施設の破損、倒壊

④ 学校教育・社会教育・文化施設の甚大な被害

- ・学校園の約80%が被災
- ・博物館、中央図書館旧館、ポートアイランドスポーツセンター等の破損、倒壊
- ・酒蔵、異人館等の破損、倒壊

(2) 都市機能の被害

① 建築物、構造物の甚大な被害

- ・全壊 54,949棟、半壊 31,783棟（2/5現在）

② 火災の延焼

- ・全焼 7,046棟、半焼 331棟（2/5現在）

③ 交通ネットワークの寸断

- ・阪神高速道路、湾岸道路等の倒壊
- ・陥没、高架物の落下、建築物倒壊等による道路不通
- ・鉄道の寸断
- ・海上都市へのアクセスの寸断

④ 港湾施設等が壊滅的被害

- ・コンテナバース、岸壁等がほとんど全て使用不能

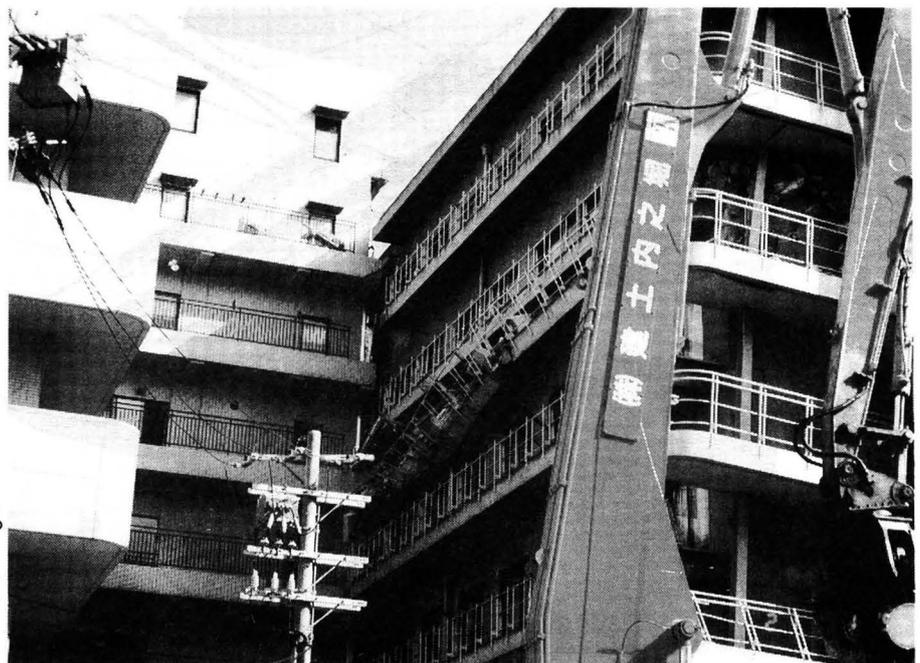
- ・港湾幹線道路の寸断
- ⑤ 埋立地の液状化
 - ・東部2～4工区、ポートアイランド等で液状化
- ⑥ ライフラインの寸断
 - ・電 気 市内全域停止
 - ・電 話 約25%停止
 - ・水 道 市内全域停止
 - ・ガ ス 約80%停止
 - ・下水道 管渠破損及び処理場の機能停止 (3/7箇所)
- ⑦ 公 園
 - ・1/3の公園が擁壁崩壊、舗装陥没、地割れ等の被害
- ⑧ 河 川
 - ・二級河川約110箇所、準用・普通河川約40箇所破損
- ⑨ 治山・砂防
 - ・緊急復旧を要する箇所 162箇所

(市街地の被害状況)

	東 灘	灘	中 央	兵 庫	長 田	須 磨	垂水	西	北	合 計	日時
死 亡 者	1,289	842	214	419	738	344	2	3	2	3,853	3/26
避難箇所	97	62	61	67	55	50	22	8	12	434	3/25
避難人数 (就寝者数)	19,310 9,005	17,313 10,428	13,957 8,569	11,825 6,977	28,137 14,524	8,640 7,371	368 263	184 167	252 247	99,986 57,551	
全 壊	11,171	11,693	4,947	8,374	12,515	6,042	90	0	117	54,949	2/5
半 壊	3,098	3,559	3,420	4,422	4,994	4,093	5520	1500	1177	31,783	
全 焼	338	495	72	1,058	3,930	1,150	2	0	1	7,046	2/5
半 焼	54	102	47	13	87	22	5	1	0	331	

(神戸市復興ガイドライン 平成7年3月27日 神戸市)

5西は完全に押しつぶされている
(北西から撮影)



2. 当院の被災状況

(1) 建物・建物附属設備・構築物

① 本館

5階東、5階西の2病棟がある5階部分が上下に押しつぶされる形で損壊し、1階及び2階の外来部門も支柱が曲がり、鉄筋がむき出しになるなど、本館改修工事を施工した部分を含め、本館全体が損壊した。このため、2月20日から本館の取り壊し工事に取りかかった。

② 新館

建物本体は本館との接続部分が損壊したほか、調査が必要であり、設備は2基あるエレベーターが損傷したほか、空調設備及び各種配管設備等の損傷状況も調査が必要である。

③ 南館

本館との接続部分が損壊したほか、建物の壁の一部にひび割れが見られ、内部の入口ドア等が一部壊れた。

(2) 機械器具

① 本館

設置した機器のうち移動できるものの一部を除き、損壊した。

主な機器は、血管造影検査撮影装置（アンギオ、平成5年度）、体外衝撃波結石破碎装置（ESWL、平成2年度）、コンピューター断層撮影装置（CT）等である。このほか、1階及び2階の外来部門ならびに3階から6階までの入院部門に設置した機器の多くも損壊した。

② 新館

設置した機器のうちホストコンピューターがデータを含め損壊した。

(3) 西市民病院損害額 5,300百万円

（内訳）	・本館建物・建物附属設備・構築物等	830百万円
	・本館改修投資額	3,530百万円
	・構築物・機械装置	10百万円
	・工具器具備品（医療機器）	930百万円

（2月1日現在推定額）



危険なため屋外階段を先ず取り除いた（南西から撮影）

3. 当日の西市民病院の記録

(1) 入院患者数

病棟名	入院患者数	深夜勤務看護婦数	診療科
3 東病棟	35	3	小児、整形外科
3 西病棟	37	4	産婦人科
3 南病棟	48	4	外科、耳鼻科
4 西病棟	46	3	内科、泌尿器科
5 西病棟	44	3	内科、脳外科他
6 西病棟	35	3	内科
計	245	20	

別に5名は外泊中

(2) 5 西病棟入院患者の救出時間等

時間帯	自力脱出	職員救出	消防隊救出 (レスキュー隊を託)	自衛隊救出	計
10:00 ~ 11:00	2	1			3
11:00 ~ 12:00					
12:00 ~ 13:00		6			6
13:00 ~ 14:00		看護婦 3	6		9
14:00 ~ 15:00		2	1		3
15:00 ~ 16:00			1		1
16:00 ~ 17:00			5		5
17:00 ~ 18:00			8		8
18:00 ~ 19:00			2		2
19:00 ~ 20:00			6		6
20:00 ~ 21:00			1		1
21:00 ~ 22:00			1		1
22:00 ~ 23:00			1		1
翌日21:36				1	1
計	2	12	32	1	47

内訳 入院患者44名、看護婦3名

(3) 患者の転送先等

転送先病院名		入院患者	当日外来患者	計
中央区	中央市民病院	13	21	34
	神戸大学付属病院	2	2	4
	神戸労災病院	7		7
	掖済会病院	8		8
	博愛病院	3		3
	春日病院	6		6
北区	神戸リハビリテーション病院	8		8
	社保中央病院	19	3	22
	真星病院	17		17
	北都病院	3		3
	松田病院	2		2
須磨区	国立神戸病院	7	8	15
垂水区	徳洲会病院	5	12	17
西区	西神戸医療センター	28	9	37
	久野病院		10	10
	偕生病院	1	2	3
三木市	三木市民病院	4		4
計		133	67	200

入院患者は別に外泊80名、退院32名 計245名

(4) 災害後の救急患者数

月 日	外来患者数
1月17日(火)当日	約600人
18日(水)2日目	234人
19日(木)3日目	336人
20日(金)4日目	393人
21日(土)5日目	197人
22日(日)6日目	206人
23日(月)7日目	483人

17日、当日は大混乱のためカルテなしの応急処置で概数

(5) 当日の死亡数

死亡確認数 67名

(内訳) ・地震で死亡(5西病棟) 1名
 ・地震後病気で死亡 2名
 ・救急外来で死亡 64名

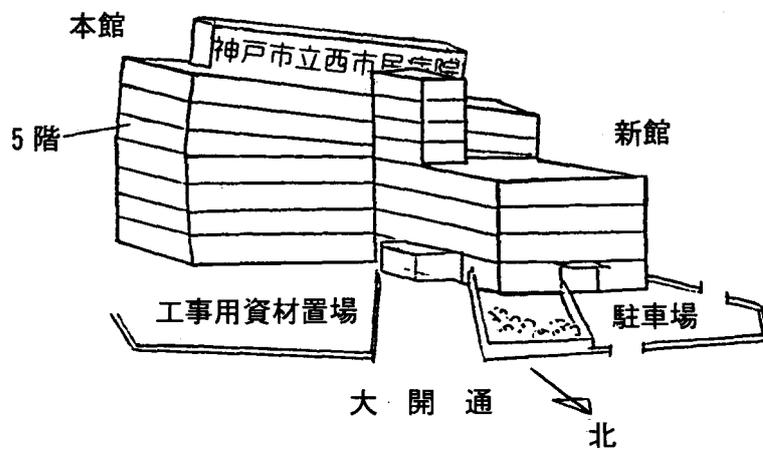
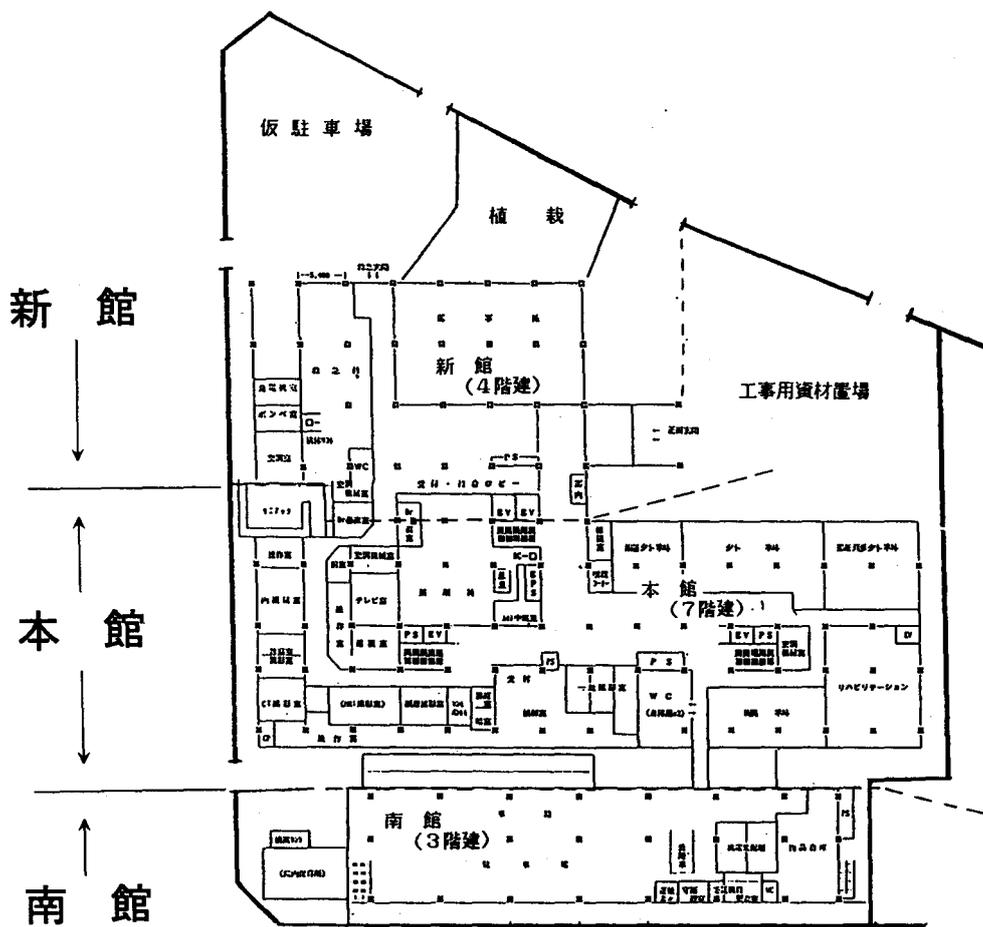
(6) 地震発生時の在院職員数

職 種	在院者数	備 考
当直医師	4名	(内科) 郡山、内藤、高田 (外科) 山本
救急当直看護婦	3名	杉浦、能勢、半崎
病棟深夜勤務看護婦	20名	3東 藤原、中島、肘井 3西 平尾、小園、西尾、河野 3南 角田、田中、安倍、山下 4西 小松、肥塚、川口 5西 藤浦、安達、田中 6西 池田、岩田、加減
薬剤師	1名	本間
放射線技師	1名	古川
臨床検査技師	1名	小平
事務職員	1名	野津
嘱託職員	4名	中塚、松本、前田、山口
計	35名	

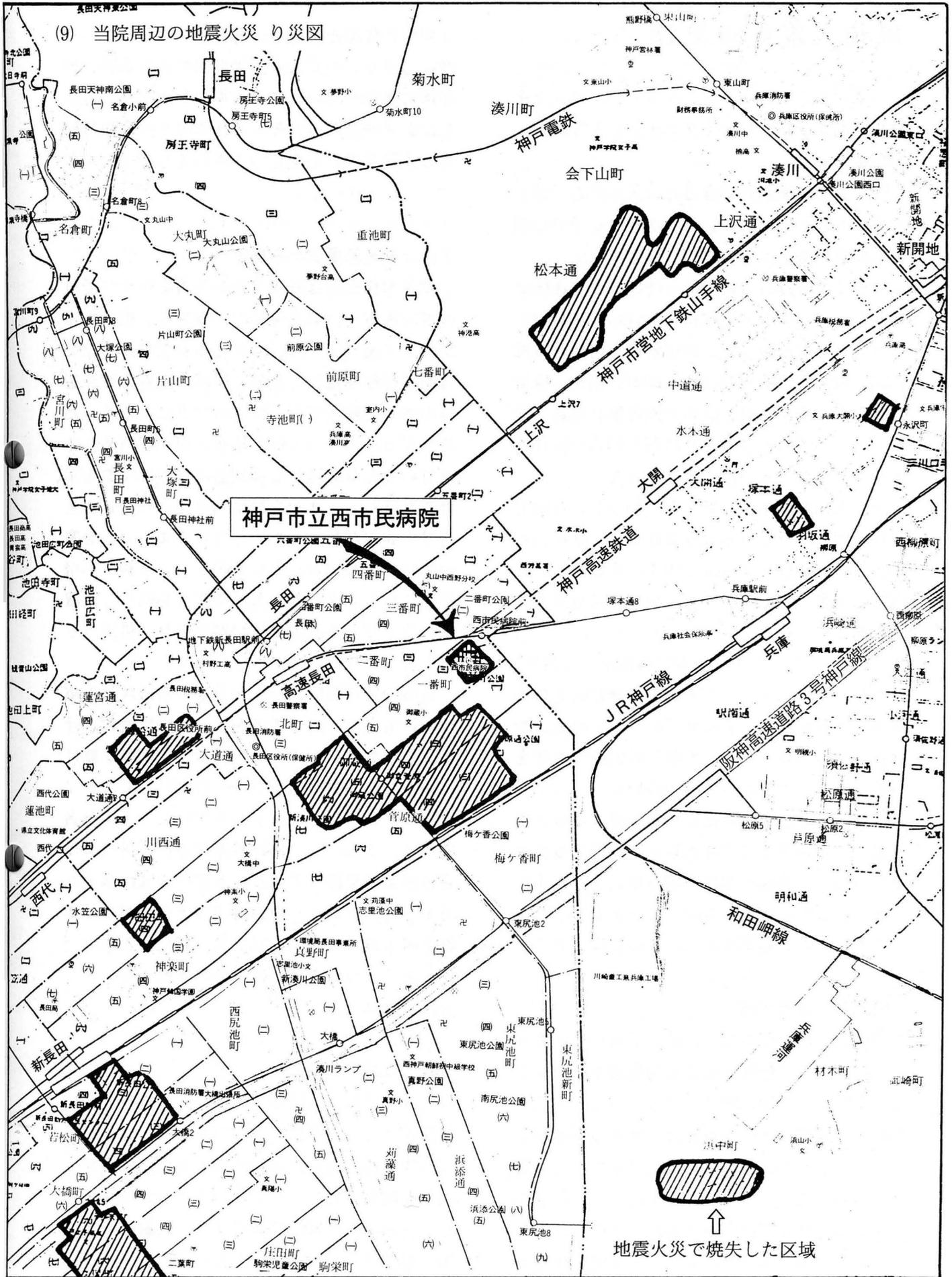
(7) 地震発生当日の職員出勤状況(17日)

職 種	出勤者数	(参考) 職員数	
医 師	40名	52名	
薬剤師他	9名	16名	
検査技師	10名	22名	
放射線技師	7名	10名	
看護婦	134名	253名	
管理栄養士			
調理師	15名	21名	
事務職員	19名	28名	
その他職員	8名	11名	
計	242名	419名	出勤率57.8%

(8) 当院平面図



(9) 当院周辺の地震火災り災図



阪神大震災の記録

ドーンときてグラッ、グラッ、グラッとそれは誰もが予期しないマグニチュード7.2の大地震であった。

関東方面で地震が起きるとは思っても、神戸は良い所だ、地震もないし、が神戸っ子の日頃からの思いであったのに。

平成7年1月17日、午前5時46分、3連休が過ぎた未明、西市民病院は245名の入院患者がいた。職員は医師4名、深夜勤務の病棟看護婦20名、救急担当看護婦3名、薬剤、検査、放射線各1名、事務当直、設備当直等嘱託職員も含め5名、いずれもがあと3時間で勤務が解けると思っていた矢先の出来事であった。

その大揺れは本館5階を押しつぶし、各階でも柱は押しつぶされるように曲がり、鉄筋は剥き出しに、建物自体も南に傾き、その南にある南館も余震による本館の崩壊があれば危険という状態となった。

地震後は245名の入院患者の病棟からの避難と他病院への転送、一方で病院に運び込まれる患者の応急処置に、また電話の不通、停電、断水、交通機関のマヒによる職員の出務が困難を極めるなど、大混乱の状態が続いた。

なお、入院患者1人はなかなか見つからず2日目の夜に遺体で発見されるという残念な結果となった。ご遺族の方にお悔み申し上げますとともに、ご冥福をお祈り申し上げます。

以下はその大震災にあたっての記録である。

5時46分、5西病棟

当夜は特に重症もなく、私（藤浦NS）達3人の看護婦は、平穩無事な深夜勤を終えようとしていました。3連休明けのことであり、20名の採血の指示を受けて5時30分、採血の準備をしているところへ、早く目覚めた長尾さん（2日目に遺体で発見）が詰所に顔を出され、採血が完了、私は病室で採血をと5011号室の前に来た時でした。突然ユサッ、ユサッと床面が揺れる

と同時に停電となり、暗闇の中、ゴーンという音、バリッ、バリッと天井が落ちてくる音、何が何だか判らないままその場にしゃがみこみました。「地震だっ」そして私達の5西病棟は44名の入院患者とも押しつぶされてしまったのです。

6時、救急処置室から病室へ

救急事務室には野津主査が当番を終えて受付の裏で仮眠中。嘱託事務の中塚さん、松本さんが窓口に座っていた。隣接する看護婦休憩室では当番の杉浦婦長と能勢、半崎の両看護婦が患者の処置を終えて眠りに入ったところであった。突然グラッグラッと揺れ始め、照明は消え、非常灯のみとなり防災監視副盤は全て異常を表示、けたたましくベルが全館に鳴り渡った。野津主査は一瞬何が起きたか判らないまま、ドアを塞いでいる倒れたロッカーを起こして事務室へ飛び出した。看護婦3人も懐中電灯を頼りに処置室へ急いだ。処置室は器材棚が倒れ、処置ベッド6台はバラバラに向きを変えていました。

宿直の前任医師、郡山部長他の宿直医師も駆けつけてきた。入院患者を1、2階に避難させることとなり、野津主査が病棟へと階段を駆け上がった。3、4階は壁のひび割れ、モルタルは剥がれ、所々で天井が落ちていた。入院患者にパニックはなく、病棟看護婦は声を掛けながら各病室を見回っていた。5階への階段は崩れて上へは上がれず、新館経由でと急いだが、本館5階の渡り廊下の先は目線の辺りに5階の天井があり、ガレキ越しに6階の病棟が見えた。5階が潰れたんだ！

7時、ロビーでは

大きな地震は病院周辺の木造住宅を軒並みに崩壊させた。不幸にして家の下敷きとなった人も多数あり、病院へは近所の人が救出した怪我人が多数運ばれてきた。畳やドアを担架代わりに血まみれの患者、骨折の患者、内臓圧迫で瀕死の患者、少しして救急車も重症患者を運び込

んできた。最初のうちは外傷、骨折患者であったが時間がたつにつれて内臓圧迫の患者、既に死亡している人を家族、近所の人が運び込み、なんとかならないかと訴えた。救急処置室はまたたく間に満員となり、患者は廊下、ロビーにあふれ、足の踏み場もない状態となった。

治療は当直の郡山内科部長、内藤参事と若い高田医師、外科の山本医長があたった。病院に近いマンションの喜多嶋拓士医師はドアが曲がって開かず窓を破って駆けつけた。古谷内科医長は自転車で、森末外科副医長は丸山から走って来た。西崎内科副医長、江原神経科部長も早かった。看護婦では長村、小椋、細田寮からは10数人の看護婦が駆けつけた。その他近くの職員が交通機関の不通の中、自転車で、走って出勤してきた。いつも訓練している緊急時職員連絡網は電話が掛かりにくく連絡できなかった。ロビーでは泣き叫ぶ患者、我先にと救急処置室へ入って来る人、息絶えた家族にしがみつく姿、それは想像を絶する光景であった。

7時、病棟

病棟では、真っ暗の中、病室から患者さんの「看護婦さーん」と呼ぶ声があちこちで起こった。詰所によってはドアが開かず、また倒れた器材棚などが行く手を塞いでいた。スプリンクラーで周囲は水浸しとなった。

7時頃、余震も落ち着いた。看護婦寮からは若い看護婦が多数応援に駆けつけた。救急受付からの連絡で各病棟ではガレキの屋外階段を伝って2階へと入院患者の避難を始めた。患者の方々は以外と冷静だった。自力で避難を始める人、看護婦の肩を借りる人、体の動く比較的元気な人は重症の患者を毛布でくるんで運んでくれた。

入院患者の搬出、救急へは患者が殺到

救急事務室が全ての指令室に変わった。外線が3本、机、カウンター、長椅子という狭い室内が外への連絡、駆けつける職員への指示、殺

到する救急患者、入院患者の安否を気遣う家族の整理などでごった返した。マスコミも多数取材にやって来た。

本館では入院患者の避難・誘導・処置が続いた。壁のひび割れ程度ですんだ新館は、またたく間に足場もないほどの満員状態となった。入院患者は地震による外傷はなかったものの、外からの救急患者はガラス破片などによる外傷、下敷きになったための骨折から内臓圧迫、火傷と重症患者に変わっていった。血まみれの患者、瀕死の状態の患者はどんどん畳やドアを担架代わりに運び込まれてきた。救急処置室では看護婦のかざす懐中電灯が頼りの懸命の治療が続けられた。

多くの患者が床に横になったままの治療となった。毛布が足りない、男子職員がガレキの山となっている非常階段をかき分けて屋上西端のリネン庫からありったけの毛布を運んだ。屋上は凹凸になり傾斜していたが危険とかはその時は一切浮かばなかった。

8時、病院前駐車場

塩見院長は自宅から近くの医師公舎へ緊急連絡の電話を試みたが不通、7階から駆け降り公舎の医師に連絡、無事を確かめてそのままJR六甲の方へと急いだ。六甲駅は高架が落ちており、そこをくぐって南へ出ると、そこのスーパーは窓枠が全て曲がってガラスが路上に散乱し、その南の古い住宅街、八幡市場は全て崩壊して、ガレキの山となっている。とにかく病院へ西へと、廃墟と化した三宮を右往左往しながら病院へと急いだ。病院へ着いたのが9時をまわっていた。

榊原看護部長が名谷の自宅を出たのが6時過ぎ、周りは未だ薄暗く街路灯も消えていた、高倉台あたりでようやく明るくなったが、横尾山、離宮公園の森で市街地は遮られ悲惨な光景は思いもしなかった。ただ大きな地震で病院に被害がなければと道を急いだ。離宮公園を過ぎると東の方、病院の方角から黒々とした煙が上がっ

ている。これは大変と道を急ぐ。途中の道は崩壊したビル、家屋が道を塞ぐ、ガスの臭いもする、そしてあっちこっちで炎を上げてビル、家屋が燃えている。人々はただ呆然と見ているだけで消防車は見当たらない。約10kmの道のりを経て8時過ぎ、病院に着く。松村副院長は地震後、すぐに鶴甲の公舎を出た。阪急六甲辺りで明るくなったがその辺りから町並みが一変し、崩壊したビル、家屋が路上にはみ出している。南の方角では炎が上がっている。特に被害の多かった新神戸～三宮間を通して病院に着いたのが9時過ぎ、約12kmの道のりを走るように駆けつけた。副院長はそれから10日間、医師など医療職員への指示、マスコミへの対応、支援物資の受付、水の確保に至るまで、病院玄関（救急入口）第一線での勤務で泊まり込みの生活が続いた。

救急前の駐車場は運び込まれた患者がそのままコンクリートの上に横になっていた。入院している患者の安否を気遣う家族、重症者を救急

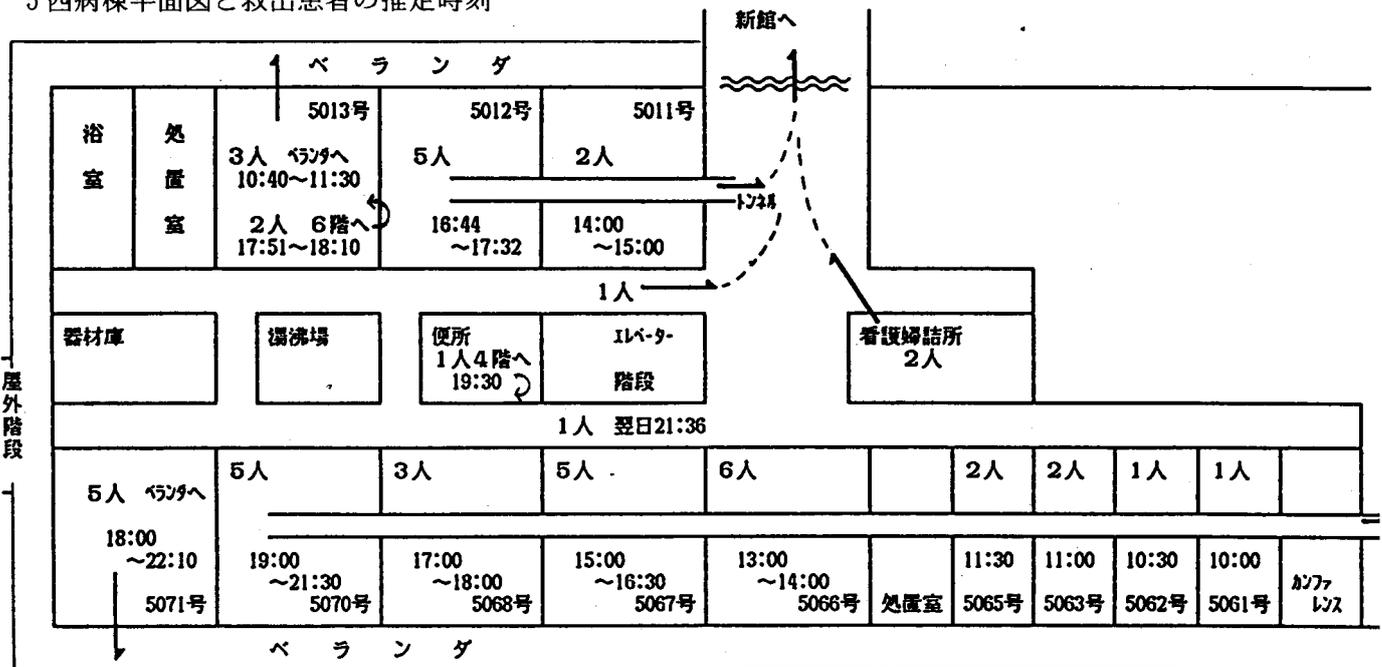
車が運び込む、敷地内も人、人、人であふれていた。

懐中電灯での治療が続く

地震と同時に院内は停電となったが、30秒後に大小2機の自家発電が動き出した。しかし信号系統の故障で大きい方は20分と持たず、再度停電、小型発電機で非常灯のみがなんとかついていた。押し掛ける患者のため院内のありったけの懐中電灯、電池を集めた。患者の治療に1人は懐中電灯で照らすのに手をとられた。廊下、ロビーは壁にガムテープで懐中電灯を貼り付けた。

水、ガスも止まった。小型発電機を照明用に接続、室内に照明が灯ったのが16時、しかし小型であったため、職員がバケツリレーで重油の補給にも手を取られた。関電からの電気の供給は特別に早めてもらったが復旧は翌日の21時であった。水は3週間の断水で手は支援物資のウェットティッシュで消毒した。トイレはまたた

5 西病棟平面図と救出患者の推定時刻



時間は救出できた時刻

(時計を見る余裕がなく推定を含む)

く間に詰まり、使用禁止、あとはレンタルトイレ10台を外に確保、近所の住民にも開放した。支援物資は届いたが、ペットボトル、ウェットティッシュ、電池が一番嬉しかった。

入院患者、長尾さんがいない！

入院患者はお互いの協力もあって大過なく避難を完了した。病棟の看護婦は各々の患者名簿と照合しながら無事を喜んだ。

潰れた5西病棟は野津主査、たまたま早く駆けつけた入院家族の知人2人で救出を試みた。早番で出勤の早かった倉地ボイラーマン、葉田放射線技師、古谷、万代医師も加わって手前のガレキを取り除き、人一人がやとくぐれるトンネルを作り、先ず5061号室の患者を救出した。また西側の非常階段を通り外のベランダ越しに5013号室の患者を引きずり出しロープでくぐって6階へと引き上げた。トンネルはなかなか進まなかった。辛うじて1人が潜れるくらいの空間を作り、前方のガレキを足で後へ追いやりながらの作業であった。余震を考えている余裕もなかった。6人救出したところでようやく、消防隊が駆けつけてくれた。そこは専門に任せて再び本館の渡り廊下から侵入を図った。「誰かいるかー！」の声に病棟看護婦さんの返事がありガレキをかき分けて進むと、1mばかり落ち込んでいる詰所の中の机の下から2人の看護婦、5011号室前から1人の看護婦を救出した。いずれも怪我はなく、絶対に助けに来てくれると信じて近くの病室の患者さんと声を掛け合い、歌を歌ったりしていたという。

救出はガレキが邪魔をして遅々として進まなかった。しかしガレキ越しに互いに励まし合いながら患者さん達もよく頑張ったと思う。入院患者が最初に救出されたのが10時頃、看護婦3人が13時過ぎ、それから懸命の救出が21時まで続けられた。しかし5070号室の長尾さんは病室にはいなくて、未だ行方不明である。午後2時に応援に駆けつけた名古屋のレスキュー隊も疲

労困憊で21時、今日の救出を打ち切ることとなった。

結局、当日は窓から6階のベランダへと自力で脱出した2人、救出できた6人、ガレキの中をトンネルを作って救出できた35人、6階の床に穴を開けて救出した2人、4階の天井から穴を開けて救出した1人の計46人となった。

18日は9時から自衛隊も加わって長尾さんの探索が再開された。詰所から30秒で歩ける範囲をトンネルを拡大したり6階から穴を開けて探索した結果、20時30分、手の先を発見、それから穴を拡大、21時36分に引き上げた時にはもう帰らぬ人となっていた。

入院患者を転送

割れたガラスで怪我をした人、火災発生で全身火傷の人、崩壊した家屋の下敷きとなった人など運び込まれる患者の治療に当たる一方で、入院患者の他病院への転送先を掛かりにくい電話で看護部長が中心になって依頼した。受け入れ先が決まった患者は救急車や応援に来た保健所の車で移送した。患者家族が乗りつけた軽トラックの荷台にも毛布にくるまって4人ずつ乗っていただいた。患者も家族も協力的だった。誰一人文句を言う人はいなかった。

運び込まれた患者の中には既に呼吸停止の人、治療も及ばず亡くなった人が続出した。1階のリハビリを遺体仮安置所としたがすぐに満員になり整形外科外来、2階の会議室、内科外来と仮安置所が増えていった。転送先病院の関係で明日の転送となった人を除いて、当日の転送が終わったのが19時。それからは長田区の遺体安置所となった村野工業高校への遺体搬送に21時までかかった。ロビーや新館渡り廊下で明日の転送を待つ患者に差し入れのおにぎりとお茶の缶を配った。

職員は朝から働き続けてグッタリと3、4階の廊下で患者とともにゴロ寝した。朝から注射用の蒸留水一口とバナナ1本の看護婦もいた。夜になっても余震は続いた。

病院の付近では朝から燃え続けている火事が空を赤く焦がしていた。この火事は翌日まで燃え続けた。

一番近い火事現場は御菅地区（御蔵、菅原通）の火事で延焼面積12.4ヘクタール、病院からは直線で130mの至近距離であった。

救急診療所となって

西市民病院は長田地区番町診療所に端を発して長田市民病院に、昭和45年には当地に総合病院を開院。14科、370許可病床を持つ西神戸の基幹病院として貢献してきた。平成元年からは新館建設に（完成同3年末）同4年からは南館建設（完成同4年度末）そして本館は大部屋を6人から4人に、中央部門の充実などを目的に4工区に分けて駆体を除き全ての改修工事に着手、既に2期工事までを12月に終えたところであった。

また平成7年度からは臨床研修指定病院となるよう申請、審査もパス、1月31日には厚生省の実地調査が予定されていた。そのためこの年末に院内の待合椅子を総替え、院内表示は1月20日に変えるなど一新を図っている矢先であった。

しかし、この震災で本館5階が押しつぶされ、1、2階の柱も曲がって、鉄筋剥き出しの崩壊寸前の状態となった。また平成5年4月に完成した南館は本館の南への傾斜のため危険ということで使用禁止、比較的損壊の少なかった新館が辛うじて使えることとなり、それからの1か月はそこで総合・救急診療所として周辺の災害にあった住民の治療にあたった。

本館は危険なため早急な取り壊しが必要と診断され、その期間中は新館も使用できず2月20日から当院より西500mの長田区総合庁舎6階を借りての仮診療所で診療することとなった。



本館1階ロビーの柱
無残に押しつぶされている

手記・阪神大震災

救急はパニック状態

当直婦長（3西病棟婦長） 杉浦美由紀

1月16日17時から能勢NS、半崎NSと当直に入る。風邪やインフルエンザのためか発熱の患者が多い。ずっと患者が続くため、19時頃交替で食事をとる。22時過ぎ少し患者が途絶えたため、今日は管理当直ではなかったが病棟巡視に行く。最初に6西に行くが詰所に看護婦はいず内藤医師のみいた、内科の患者が明日転棟できることを医師より聞く。他の病棟には詰所に看護婦があり、特に変わりがないとのことであった。どこも空床が少なく男性患者が数人入れるだけであった。救急に戻りしばらくすると患者が来はじめる。17日5時頃ようやく患者が途絶える。仮眠の時間のため、ベッドに休む。なかなか寝つかれずようやく眠りに入ったとたん、急に上下にどンドンと動いた瞬間ベッドが横に滑るようにぐらっと動いた。“地震”と思い飛び起きるが寝ている場所がはっきりせず、時計を見て5時45分ぐらいであり仮眠室と気づく。その間数十秒のことであり、隣に寝ていた能勢NSと地震のことを話しながら起き、3人で休憩室を見に行くとテレビが床に落ち、冷蔵庫等が動いていた。受付へ行くと物が散乱していた。処置室は戸棚が倒れ物が散乱、アンプルも割れたりしていた。停電になっており暗く、水も止まっていた。廊下には人が数人おり、すごかったことを話していた。正面入口の方を見るとフラッシュが点滅し、もやがかかっている中「非常口はこちらです」とアナウンスをくり返していた。そこには誰もいなかった。まだ状況がはっきりせず大きな地震だったという思いだけであった。

病棟の状況を事務当直の野津さんと見に行く。3西病棟は患者には異常なしと聞く、分娩も終わった後で、車いすに乗った褥婦がベビーを抱いていた。大丈夫ということだった。3南病棟はレスピレーターが止まり2人の患者にアンビューを使っているとのことであった。点滴がは

ずれてしまっている患者がおりその処置などを手伝う。自分達でできるとのことであった。天井から水が漏れているところが所々あった。患者はびっくりしていたがパニックの状態ではなかった。3東病棟は異常ないとのことで、看護婦が手伝うことはないかと聞いたため、3南を手伝うように指示する。4西に行くと郡山医師がみえ、危ないので患者を1階に集めるように指示される。3階にもどりその旨を伝える。救急にもどり再度受付にいた郡山医師に1階に集めてよいか確認する。医師に5・6階へ連絡を頼む。その内に怪我をした患者が来はじめたため、処置ができるよう準備をはじめた。内科医師にナートを頼み、外科医師が来るのを待ったが、来ないため内科医師のみで治療をしていた。ナートセットが足りなくなり中材に取りに行く。その間、処置を能勢NS、半崎NSに頼む。中材の中は物が倒れ入りにくかったが、かきわけ、乗り越え中に入り、ナートに必要な物を持ち処置室に戻ってくる。患者はあふれかえりパニック状態になっていた。病棟の看護婦も手伝いにおりてきた。古谷医師が手伝いに現れ処置をお願いする。看護婦も次々手伝いに外から来てくれる。非常灯のみでは暗く処置が難しいため懐中電灯を使用した数が不足、病棟の物も持ってきて使用。呼吸停止の子どもが運びこまれたが、挿管チューブの合うものがなく捜しに看護婦が行く状態であった。戸棚が倒れ物が散乱しているため、綿球や消毒液がなく、一つ一つ他の場所へ取りに行かないといけない状態であった。次々に救急車が患者を運びこみ、呼吸停止の患者も運びこまれ、パニック状態であった。火傷の患者も来はじめる。これは夢ではないか、こんなことなどが頭の中をよぎっていった。泣き叫ぶ人や怒鳴る人、地獄のようであった。松本NSが死体を一か所へ集めていってくれたが、すぐその場所は一杯になってしまった。看護婦、医師の手伝いがどんどん増え、みんな処置におわれたが材料が不足し、ナートセットは同じもので針と糸だけをかえ、麻酔もなしで

応急処置でナートしていってもらおう。処置室のカーテンを患者、家族はひきちぎったりしてパニック状態は続いた。

小椋NSが患者を整理しないとできないと言い、患者を処置室から少し出してくれたため処置がしやすくなったがすぐに同じようになっていった。入口に倒れていた戸棚を誰かが邪魔なため起こしたため、ガラスの破片が散乱し危なくなった。廊下でも挿管をしていった。外科外来をあけてくれたので、そこで創処置を、整形外来では骨折患者を誘導し運んでいった。処置室では呼吸停止の患者をより分けて処置ができるようになったが、患者はどんどん増えていった。看護婦から家の中は物が倒れ無茶苦茶であることや家が燃えていることなどを聞く。5時46分に淡路島が震源地で神戸はマグニチュード7.2、震度6であることも聞く。情報は何もなくてただ患者が次々現れるのを見て大変な災害であるとしかわからなかった。5西がつぶれていることもパニック状態の時に聞く。6時30分頃からずっと戦場のような状態が続く。

10時頃、吉田さんと5西の状態を聞き2人で見に行くことにした。本館の階段の5・6階は壊れ上れない状態であった。新館の階段を上り5階へ行く。5階西フロアの上150cmぐらいのところには6階のフロアがあった。5階に行ける状態ではなくコンクリートや鉄骨などぐちゃぐちゃになっていた。工事中の5階フロアに行ってみると西の方が6階におしつぶされていた。ボイラーの人達がおり救出を試みようと考えていた。しかし思ったより困難のようであった。藤本婦長もやってくる。反対側から助け出せないか男の人が一人で見に行く。5階西の南の窓から職員が入りその近くにいた患者の安否を確かめる。2人の男性患者がそこから助け出される。それ以上は無理なため、今度は新館とのつなぎの廊下から入り助け出そうと試みる。12~13時ぐらいに消防の人が来て一緒にくずれた中に入っていった。看護婦3人と患者も数人助け出される。その後機動隊が来た。今度は5

階東の工事中のフロアから救出を試みる。大成建設の人、消防の人、機動隊の人が協力して西まで入れる隙間を作っていた。そこでも患者が数人助け出される。周辺地区の火事の煙のため空は真っ黒であった。暗くなってからレスキュー隊が到着し、4階西の南側の窓から5階に上り患者を救出する。患者が助かる度みんなて手を叩いて喜ぶ。救出した患者を新館の4階、3階の廊下に寝かしていった。その後3西に行く。周産期棟には避難した妊婦、褥婦が寝ていた。余震が続くため患者の転送を北口医師は考え、最初に新生児と妊婦を1人神大病院に転送。他の人も全て他院へ転送する。

18日0時過ぎ新生児室にマットレスをひき看護婦山本、鎌田、藤原、松川と北口医師、谷医師と一緒に横になる。余震がある度飛び起きる。1日何も考えられなかった。夢ではないかと思いながら、命を助けることで必死であった。そんな中で産婦が無事に出産したということの後で聞いてとっても嬉しく思った。

互いの役割を確認し病室へ走った

3南病棟 角田千賀子

1月17日、4人で深夜業務をしていた。5時30分、看護婦のひとりが「行きましょうか」と椅子から立ち上がった。採血・検温・排液と尿量チェック等に行く時間である。が、何故かその時、私は「今日は、6時頃からにしましょう」と、坐り直した。5時45分、他の看護婦もソワソワしだしたので、「じゃ、行きましょう」と気を引き締めて立ち上がった途端、あの地震。「あ、地震や、このテーブルの下に入って！」幸いまだ詰所に4人共居た。テーブルの下に入り、テーブルの足に必死でつかまり、激しい揺れが終わるのを待った。「看護婦さん！来て！」「早く来て！」あちこちから叫び声が上がったが動くことができない。「大丈夫やから！すぐ行くから！恐いでしょうが揺れがおさまるまでじっとしていてね！動かないでね！」私達

も必死に叫び返した。何秒後だったのか、やっと激しい揺れはおさまった。レスピレーター装着患者2人、胸腔ドレナージ中の患者が1人…それぞれの患者を思いながら「アンビュー押して!」「ドレーンのクランプを!」互いの役割を確認し合いながら病室へ走った。「大丈夫ですか!」「ケガは!」喉摘で声が出せないMさん、どんなに恐かったであろう。「Mさん!大丈夫ですか?大丈夫だったら手を上げて!」顔をのぞき込むと、サッと右手を上げてくれた。「よかった。恐かったでしょう…。必ず助けにくるからね、忘れないからね。他の患者も見えないといけないのでじっとしておれないけど…必ず来るから待っていて下さいね」と言うとうなずきながらもう一度右手を上げてくれた。各病室を「皆さん、大丈夫ですか」「〇〇さん居ますか、ケガはないですか!」「恐かったですね…もう大丈夫と思う…指示あるまで待っていて下さいね」と、毛布や布団を掛けたり点滴を直したりしながら異常がないか確認していった。今までにない激しい地震にもかかわらず（激しい地震だったからか?）、患者は誰ひとり騒ぐこともなく静かだった。まもなく、他病棟の看護婦が「3南は大丈夫ですか!」「懐中電灯はありますか?」と来てくれた。互いに患者や病棟の情報交換をした。「O₂ボンベを貸して下さい!」と血相を変えて飛んで来る看護婦もいた。皆、患者を助けなければ、守らなければと必死だった。「頑張ってるね」「頑張ろうね」「気をつけてね」と声をかけ合った。そうこうしていると、時間は憶えていないが寮や近くに住んでいる仲間が「患者さんは!」「大丈夫でしたか!」「すぐしないといけないことは!」と息を切らせながらかけ込んで来てくれた。嬉しかった。患者全員無事であることを報告し（この報告ができて本当によかった）まず自分で動くことのできない患者の側に行ってもらった。そして、アンビューを押しているのを交代してもらったり、吸引器が使えなかったので綿棒で痰等を除去してもらったり、病室の飛

び散った物を整理してもらった。心強かった。「夫は!」「父は!」「母は!」と、かけ込んで来られる家族や「夫が出張中で家には子供しかいないので電話を…」という患者への対応、指示の出た転院、外泊患者への対応…、院内放送が始まった、「5階の看護婦さん、連絡して下さい」5階に何が…驚いていると「5階がない!」と叫びながら知らせに来る看護婦。「ない…?」意味がわからなかった。「6階が落ちて…押しつぶされているんです…6階の下がすぐ4階なんです!」呆然どしてしまった。自分が感じている以上に被害は大きかった。目の前に見える5階病棟はペチャンコだった。患者や看護婦の様子は全くわからないという、胸がしめつけられる思いだった。病室の窓からは多くの家屋が倒壊していた。火事も起こっていた。救急外来に電話で「近くで火事らしいが確認して下さい!そして指示を下さい!」と伝えた。外来には次々患者が運び込まれているという。夢なら早く醒めて!という思いの中、時間はどんどん過ぎていった。

追伸

書いていても支離滅裂で読みにくい内容になってしまった。前後の食い違いもあると思う。あの日から3週間…それぞれの3週間だったと思う。患者、家族、医療者が共に泣いたり笑ったりして過ごした「西市民病院」は間もなく消えてしまう。厳しい現実の中、「西市民病院」の再建を心から願っています。

床・階段が損壊の中、避難はスムーズにできた

3西病棟 西尾詩子

地震が起きた時は、起床時間前であったため、患者さんは皆各病室中で入院中だった。地震直後はナースステーションの棚や机、病室のテレビ、ベッドなども大きく移動していた。院内中サイレンが鳴り響いており、患者さんから「火事じゃないの?」という声も聞かれ、病棟中がパニックになった。救急受け付けに指示をおお

ぐと最初はそのまま病室にいるようにとのことだったので、とりあえず患者さんには「大丈夫だから」と声をかけ、病室に戻ってもらった。

その後数十分経過し、余震も何度かあったため患者さんの不安は大きくなり、もう一度救急に連絡したところ、今度は1階の方が安全なので患者さんを移動させるようにとの指示だった。自分で歩行できる患者さんは新館の階段を使って自分で降りてもらおうよう誘導し、歩けない患者さんは車イスで移送した。床や階段も損壊していたので2～3人でかかえおりの移送だった。幸い3西婦人科はその日重症患者が少なかったため、患者さんの移送は比較的スムーズに全員負傷することもなくできた。患者さんを移動させた後は、何も指示がなかったため、他科の患者移動の応援に行ったり、救急外来の処置の介助についたりした。外来では深夜以外のDr、NSもかけつけてくれており、救急蘇生や創傷処置などにそれぞれ走り回っていたが物品が不足しており、手のあいている者がOP室やICU、病棟などに行き衛生材料やディスポ製品などをかき集めて処置をしていた。外来は救急患者と職員でいっぱい足踏み場もない程だった。出口は骨折、熱傷など重症の人が次々と運ばれてきたが救命を優先し、生死に関わる状態でない患者はできるだけ後にまわってもらうようにと大声でNSが叫んでいたが、患者さん達は皆パニック状態で耳に入られないようで我先にと入ってくるためうまくまわっていなかった。NSも人数は多かったが場所が狭いことや、当然のことながら役割分担もできないため、各々がバラバラに行動し動きがとりにくかった。地震後3～4時間経つと人間は多かったが一時に外来が落ち着き、もう一度入院患者を各病棟に返すようにという指示を同僚NSから伝え聞き、自分の病棟の患者さんを誘導した。入院患者は軽傷の人から自宅に連絡してもらい、帰れる人は自宅に帰ってもらうようにした。

陣痛室で分娩、ホッとしました

3西病棟 平尾正美

地震のあった時、私は新生児室の授乳室にいました。10時30分前にお産があり、ベビー受け、後片づけも終わり、また5時からの授乳も終わり、ホッとしていたところでした。地震のあった時、何がなんだか分からなくて一瞬寝ぼけているのではないかと思った。でもロッカーが倒れてきたり、机の上のカルテがぐちゃぐちゃに落ちたのを見て地震だと気付きました。地震の間、イスにつかまるのがやっとで立ち上がることはできませんでした。地震が止んですぐに、ベビーちゃんの所に行って、ベビーが元気なのを確かめホットしたのもつかの間、分娩台に寝ているPtさんのことが心配で分娩室に行こうと思いましたが、ベビー室のドアが開かずあせりました。必死でこじ開けたのですが、ロッカーや棚が倒れていて開ける状況ではなかったのですが、そこをのぼって分娩室へ行きました。分娩室もぐちゃぐちゃで分娩台も動いていたのですが、Ptさんは元気で安心しPtさんに大丈夫のことを伝え、次に詰所へ走って行きました。詰所の方を見ると、砂けむりがたっていてこわかったです。ひとまず小園さんや西尾さんも無事だったので、1人は救急外来に今後の対応をどうするか聞きに行ってもらい、他のNSでPtさんの状態をチェックしました。そしてすぐに新生児室にもどり、ベビーを2名ずつ抱え各自のママに手渡し、ひとまず1階に降りてもらうことにしました。この時が多分6時30分を過ぎた頃だと思います。それから私だけが救急外来に手伝いに行き、残りのメンバー（3名）で入院Ptさんの誘導を行いました。救急外来では、はじめ外傷のPtさんが多く、出血の止まっている人はNSが消毒etcの応急処置をしました。沢山のPtさんで救急外来はごった返していました。

時間がたつにつれて（7時30分頃から）、外傷から意識レベルのdownしている患者が増えました。途中、切迫流産のPtさんが来られたので、西尾さんに救急外来を代ってもらいまし

た。3階の病棟に行く途中も外からのPtさんの家族の方に呼びとめられて、「車の中にいる。意識ないから何とかしてくれ!!」と何度も言われ、その都度外の道路に見に行きました。すでに呼吸停止していて、身体も冷たくなっているPtさんもいました。でも、家族の人の顔を見ると何も言えなくて、Drを呼びに何回も走りました。小5の子供も運ばれてきて、呼吸停止しているのですがDrがおらず、先輩のNSと一緒に人工呼吸をしましたが結局はダメでした。お産の人で、もともとは中央Hpで検診していたのですが、橋が渡れず他の産院にも断られたために来ている人もいました。私は、分娩室もぐちゃぐちゃだし、どう対応していいかわからず、杉浦婦長さん（その日当直だった）に相談しました。その産婦さんも苦しそうだし、夫も目に涙を浮かべて私の手を握って「お願いします。」と頼まれて、そのまま一緒に陣痛室で分娩になりました。夫もPtさんもととてもホッとした様子でした。

あの1月17日は本当に悪夢でした。勤務中に、時間を見つけて自宅にTELしましたが通じず、心配でした。帰る途中も壊れている家や外来のPtさんを見て、母親のことがとても心配でした。

詰所は天井が落ちてつぶれた

4西病棟 小松啓子

1月17日は3連休明けで採血も多く、GTTもあり、又、重症者もいたため、NSは3人共5時30分頃から各々動き始めた。もし、すごく平穏な深夜で、3人共6時近くまで詰所で座っていたら死んでいたと思う。

私は、起床した人から採血していこうと、467号室にいた。他の2人もそれぞれ病室にいた。私が採血しようとしたPtは上下肢の浮腫がひどくて、とても採血できないな—とっていたところ、突然大きな揺れが南北にきた。新聞etcで20秒とありましたが、すごく長く感じた。と

にかく本当に何が起こったのか想像もつきませんでした。この状態がこの4西だけなのか、西市民病院全体なのか、街全体のことなのか全く考えがつかなかった。部屋は電灯が消えまっ暗になり、スプリンクラーが作働し床はびしょぬれ。病室の人達は私同様びっくりして皆起き上がってきましたが、パニックになる人がいなかったおかげで私も比較的落ちついた心でいられた。外から私の名を呼ぶ声が聞こえ、廊下へ出ようとしたが、スライド式の戸がなかなか開けられず、力づくでやっと人一人出れる程開いた。廊下に出ると目の前の詰所は天井が落ちてつぶれ、それはカウンターのある方へと次第にひどいつぶれ方で、廊下の天井も半分崩れ、がれきで廊下も2/3ぐらいの幅がふさがっていた、もちろん水びたしで。非常灯の明かりとアナウンスがずっと鳴り続け、がれきのほこりで前方数メートルも見えづらくなつた中で唯一頼れるものだった。NS3人でともかく部屋をまわってPtを見まわった。Ptは皆本当に冷静で、誰一人パニックにならず、「とにかく、ここは危ないからあっちへ（4東の方の仮眠室の方はほとんど無傷だったので、まずそこへ誘導しようと思った）行こう」と気のあせる私の言葉に「どこへ行くんや?」「外へは出ん方がええんちゃうか?」と。多分病室の天井は全く無事だったのでそう思ったのですが、あの詰所や廊下の状況から、この病室もとても危ないと思った。とにかく歩ける人や少し危かしい人は、同室者に付き添いをお願いして、4東の方や屋上へ続くエレベーターの前あたりに行ってもらった。4西、4東の両端にある非常階段は崩れて通れない。屋上への戸も開かない。下の階がどうなっているのか全く分からないし、新館が安全なのか危険なのか全く分からず、集まったもののこのPtをこの先どうしたらいいか全く分からない。頭に浮かぶのは「どうしよう」という言葉のみ。何をしたらいいのかも分からないまま、病棟内を体が勝手に走り続けていた。そのうち3西のNSや、職員の男性1人、女性1人（給食

の方と思う)が応援に来てくれ、新館の階段から1階へ誘導してくれた。すごく救われた気がした。川口さんに1階まで介助を要するPtの誘導をお願いし、肥塚さんと私は病室に残っているPtの護送、担当Ptの誘導と手分けした。手を引き、がれきを足でどかしながら、あせる気持ちをおさえ、いつものリハビリの時以上にゆっくり声をかけ、Ptにあせる気持ちを持たせないよう勇気づけながら、ほとんどおだてるように声をかけ、話をしながら階段の所まで歩いた。歩けないPtは背負った。全くの寝たきりの2人をどうしようと思っていたところ、4西に入院していた大学生の男の子や、高校生の男の子、そして誰か知らないけど若い男の子が2~3名手伝ってくれて、シーツのまま運び出した。私達NSの力では皆を運び出すなどとても無理だった。力を貸してくれた人に本当に逢ってお礼を言いたい気持ちで一杯です。

車椅子の人を何人も、4人で車椅子ごと4階→1階へ暗い階段を降ろした。ストレッチャーあるいは毛布のままは3~4人いたと思う。全員どうにか1階か2階へ誘導できたが、その中に、ターミナルのPtではあったがO₂も輸注ポンプでの点滴も途切れて亡くなってしまった人や、O₂ポンベをひいてトイレに行っていて、地震に逢ってしまった為に転倒して、たぶん腰部あたりの骨が折れたと思われるPtさんもいて、そのことが残念です。今思えば、トロッカーの人にはチューブを折り曲げて、自分で持たせておくとか、点滴の持続の人にはもっと点滴管理するべきだったのかなとか、とりあえず貴重品だけは持って行ってもらった方が良かったのかとか色々思うけれど、あの時はとにかくこの病棟から逃げなきゃという思いしかなかった。

Ptを全員降ろした後、寒いので毛布や布団を取りに行ったり、O₂ポンベや尿器などPtの方からの要求に応え、その後、点滴ボトルやルート類、薬品、その他とにかく病棟から持ち出せる物を片っぱしからワゴンやビニール袋に詰め込み、喜多嶋明宏Drと共に病棟と1階を何往復

もした。その間も、何人ものPtさんや家族の人に手伝ってもらった。とりあえず4階が一段落した時、池田主任に会い6西の救助を手伝いに行った。そこで5西が押しつぶされていることを目で見て大変なショックを受けた。本館6階から新館5階へ、マットや長椅子などですべり台を作り、とにかく1人でも早く多くの人を新館の方へ移した。この頃になると、当直以外の職員も次々に病院にかけつけてきて増えていた。6階に上っても、残されているのは寝たきりの人ばかりであった。救急病室ではすでに亡くなってしまっている人もいて、何て大変なことになったのだろうか、言葉も出ない時が過ぎた。

あの日のことは今でも思い出すとつらくて泣けてきます。4西のPtさんがあの後どうなったのか、家に帰った人、他の病院へ移った人、いつの間にかいなくなってしまった人、皆、今元気なのかとても心配です。こんな形で皆と別れることになってとてもつらいです。

患者と声をかけながら救出を待った

・ 5西病棟 藤浦ひろみ

1月17日は患者数46名(うち外泊2名)と少なく、始終観察が必要な重症患者もいなかったため、夜間はコールも少なくNSもゆっくり過ごしていました。3連休明けで20名以上の採血指示があり、いつもより早目に採血に廻ろうと思っていました。5時30分頃から何人かの患者が洗面等の活動を始めていました。私は5時40分頃、南側の5061号~5065号の個室の患者の巡視をして一度詰所に戻りました。その時詰所に患者の長尾さんが採血に来られており、他のNS2名で採血しているのを確認しつつ、私も起床している患者の採血に行こうと詰所を出ました。北側の5011号の前に来た時、グラッと揺れ「地震?」と思った瞬間、廊下が大きく傾き、私は倒れてうずくまってしまうました。同時に上からコンクリート天井が轟音をあげ落ちてき、頭だけを抱え込みうずくまったまま動けませんで

した。揺れがおさまった時、目前の5012号への廊下はコンクリートの山で塞がれ、隙間からわずかに見えるのは5011号入口に6階からのベッドが2台ほぼ垂直に垂れ下がっているのと、詰所前のエレベーターホールの非常口を示す明かり程度でした。私の頭上は空調の太いパイプが斜めに落ちてきていたためか、自分がうずくまっていられるだけの空間は保たれていました。直後からスプリンクラーの水・ガス臭が流れてきましたが、しばらくして(30~40分程で)止まりました。最初、私を含め患者たちも何か起きたか分からず、口々に「地震か?!」「助けてくれー、看護婦さーん」と叫ぶ声が聞こえました。私は5011号の患者2名の名前を呼び無事を確認しました。5012号、5013号にも怪我がないか声をかけ、5012号には5名全員が無事であることが分かりました。元々5012~5013号は軽傷で若い(40~50代)男性が多かったため5013号の何名かは自力で動き、脱出を試みている声が聞こえ、返答はないものの、その様子からは5013号の患者も無事であることがうかがえました。他のNSの名前を呼びましたが返答はありませんでした。しばらくして患者の1人がラジオを探しだし、神戸・大阪でかなり大きな地震が起こったことを知りました。持っていた懐中電灯の明かり、非常口の明かりは1~2時間で消え、以降は真っ暗なままでした。2~3時間後、ヘリコプターの音とパトカーらしき音が1~2度聞こえ、「5階の看護婦さん、おられたら救急まで連絡して下さい」という放送があり、大声で叫びましたがそれっきりで外の様子は全く分かりませんでした。その後、頭上から聞き覚えのあるNSやDrの会話している声が聞こえ、走り回る振動で6階の患者の救出作業をしていることが分かりました。聞こえる声や足音に大声をあげましたがいつも反応はありませんでした。私は近くにいるらしい患者と声をかけあいながら過ごしました。皆、比較的落ち着いたように話をしたり笑ったりもしました。中には「助けてー」と大声で叫び、壁をずっと叩きつけてい

る患者もいましたが、同室(5012号)の冷静な患者が皆を諫め指揮をとっていました。私はそのリーダー格の患者と連絡をとりながら救出を待ちました。何時間か後(12時頃?)外にいたDrに5012号の患者が声をかけ、まだベランダの損傷が軽かった5013号の患者が救出されたようでした。その後、詰所の方からDrの声が聞こえ、他のNS2名が救出されている様子がうかがえ、私もNSと患者7名が無事であることを大声で知らせました。声が届き、14時頃私は職員によって新館通路の方から救出されました。残った患者もその後、職員とレスキュー隊により救出されました。

地震当日から何日も過ぎた今になって、地震があったということ、自分が生きているという現実を実感しています。「本当によかったね」と声をかけていただくたびに、西市民病院の皆様やその他大勢の皆様に深く感謝しています。

誰もが自分や家族のことで必死だったあの日に、何時間もかけて病院までかけつけ患者の救出・看護にあたられた職員の方々。救出時に「必ず行くから」と力強い言葉をかけて下さった先生。私は西市民病院で、こんな人達と一緒に働いていたことを大変嬉しく、誇りに思っています。そして壊れてしまった病院を前にすると、あの日の恐怖と、もうここでみんなと一緒に働けないのかという思いで涙がこぼれます。

奇跡的に助かった私は、亡くなられた方をはじめ大勢の方々から頂いた命だと思っています。今はまだ人を看護する自信がなく不安ですが、どんな形でも看護ということをつづける中でこの命を大切にしていこうと思っています。



5 西患者の救出に立ち合って

看護部主幹 藤本洋子

1月17日5時46分、一瞬何が起こったのか、頭の中は真っ白になってしまった。近所の人の助けを借りて、やっとの思いで外に出てドアを閉め病院へ向かった。病院に到着したのは10時過ぎだった。そんな時間が経っているとは…。直ちに看護部長から5階が壊れた、5西の患者の救出に行つて欲しいと指示があった。

4階東の非常口から5階東へ上がった。5西の天井が落ちているのを見て、余りのひどさに震えが止まらなかった。5西と5東の病室の境南側に狭い通路が作られ、中に職員が入り壁を壊したり柱を切ったりしながら病室へ近づき、救出作業をしていると聞く。その入口には布団を敷き患者さんの救出されるのを待つ。5西NSは硬い表情で並んで待機していた。私もそれに加わった。どれ位の時間が経ったのか…。中から「もう少しだ。〇〇さんと会話できた」数名が経つ。「毛布をください。もうすぐ出ますよ…」急いで毛布を中へ送り込む。そしてPtさんが救出されてくる度に氏名を確認し、状態を観察しながら「よかった、よかったね、大変だったね、もう大丈夫よ…。」と声をかけ、Ptさんも「大丈夫です、ありがとう、お世話になりました」と笑顔を作ろうとされるが…緊張で笑顔にならない。毛布、布団で被い4階の仮眠室でDrの診療を受ける。数名が5階から救出された。家族の方も来られ「〇〇の家族です、大丈夫ですか、生きていますか…」と聞かれるも良い返事ができず心苦しい。

午後になって、レスキュー隊が到着し、職員と交代した。職員は6階西の西側ベランダの救出に向かった。6階から5階西のベランダへ降り、窓から内へ向かって声かけをし、確認を急ぐ。外窓から2名の患者から応答があった。窓から入り壁を壊してベランダへ出て命綱のロープを体に結び、ベランダの柵の上から引き上げた。2名は救出できた。更に隣の病室の3名の氏名も確認できたが、鉄筋とベッド柵が重なり、

窓側からの救出は困難であると判断し、新館からの渡り廊下へ場所を変えた。

この頃になると、レスキュー隊も多くなり、通路から西側の病室へ入った職員に代わって、レスキュー隊によって西側の氏名の確認できた3名の救出が始まった。同時にベランダからの救出も行われたがこれは困難のようで、通路側からにじぼられた。間もなく患者3名が次々に救出され、更にNS3名も続いて救出された。通路は患者家族、職員、そして報道関係の人、人、人でごった返し、救出される度に記者から「何人目ですか？あと何名残っているのですか？」の問いかけとフラッシュ。レスキュー隊の「道を開けて、じゃまだ、どいてどいて…」がくり返された。5東側からの救出も進んでいるとの連絡が入ってきた。入院患者の氏名を病室を確認しながら残されたのは南側西端の2室となつて、2室については天井が落ちてつぶされ5階と新館通路側からの救出は無理と判断され、病室外側からハシゴ車による救出に切り替えられ、準備が始まった。外はすでに暗くライトで照らし、一番奥の病室の患者の氏名を確認しながら部屋に入り救出が進んだ。救出と同時に隣室の患者の氏名を呼びかけ、安否を確認したが1名の応答がないとの話。しかし、救出中の患者から「地震が起こった直後に隣室の患者全員と話した、長尾さんの声も聞いた、頑張ろうね、と言った。その後、声は聞こえなくなった…」と。レスキュー隊が病室に入って確認したが、1名長尾さんの姿はなかった。

NSの話では「地震の起きる前に詰所で採血し病室へ戻った。1分もあれば戻れるはず…。多分戻れていたと思う」との話。NSの話、隣室の患者の話信じていたが…。長尾さんは病室には戻っていなかった。病室で確認された最後の患者を救出し、姿の見えなかった長尾さんを残して当日の救出作業は終わった。夜中であった。

注射用蒸留水とバナナ1本で頑張りました

内科外来 小椋京子

突然の強い揺れで眼が覚めた。揺れがおさまって室内を見ると全ての家具が倒れている、外に出ようにもふすまもドアも開かなかった。ようやく近所の人に助けられて外へ出た。10分位かかっていた。

お向いの奥さんがガラスで足を切り、激しく出血している。室にもどり救急箱を探して、圧迫止血、ナートが必要だったので病院へ行くように言ったところで、これはさぞかし病院は大変だろうと思った。夜が開けるのを待って単車で病院へ向かった。いつもは単車なら5分位で病院へ着くのだが、すでに梅ヶ香町は火の手があがっている様子なので、国道2号線を西へ東尻池の交差点を右折、北へのルートを取った。2号線の東行き車線に軽乗用車がボンネットを下にして大破している、高速道路から落ちたのだろうか、車の中には人は乗っているのだろうか、心の中で手を合わせて病院へ急いだ、車は1台も走っていない、自分の単車の音しかしていない。

JR高架を抜けると、御蔵方面は2階立ての建物がほとんど1階になっている。パラパラと人が歩道に出て来ているが無言で茫然としている。左手に兵庫商会のビルが火を吹いているフラッシュ状態だ。もちろん消防車も何も来ていない、燃えるにまかせている。交差点を右折すると病院。病院の前は人でいっぱい、救急外来前で長村NSと会った。救急前の廊下は外傷患者であふれている。一目で重症とわかる人が戸板で次々と運ばれて来ている、まだまだ次々と来ている、前に進みにくい。

パジャマの上にレインウェアの上下を着ただけで走って来たので着替えに走った。2階の更衣室は自動シャッターが閉まっているので行けない。4階のオペ室に行った、電動のドアは停電のため開かない。無理やりこじ開けて中に入った。オペ室もぐちゃぐちゃ、高価な機械が倒れている。オペ着に着替え、持てるだけの糸と

消毒薬、ガーゼ、外科のセットを持って2人で外科へ急いだ。多分7時前だと思う。救急の中は患者であふれて身動きが取れない。

当直の医師と看護婦が自分でできる限りの努力をしている、私達2人をまるで訴えるように見た、すぐに半崎NSが糸と呼ぶ、外科のDrと半崎さんにナートセットを渡し自分も処置につく、左の方で内科のDrと能勢NSが2~3ヶ月のベビーの蘇生をしている、それぞれが手いっぱい働いている、さわぐ患者はいないが人にゆずる人もいない。「何でこんな患者を処置室に入れているの」すぐに無理もないことを知った。次々と戸板やたたみ、机などに患者を乗せて入って来る、寝かせる場所もない、意識のある軽傷の人は出て下さいと頼んでも患者は動かない、自分を先に見てほしいのだ、でも動きが取れない。男の子が運ばれて来た、父親が「助けてくれ」と叫んでいる、もうすでに死んでいる、手が暖かい、挿管し心マッサージをするが瞳孔は散大している、Dr古谷が来て「何分心マッサージしている」「30分位です」「もう無理だ」とDr、もう次の子供が来ている、父親の方を見上げると「だめか！だめか！本当にだめなんか」と、私が首を横にふると一瞬眼が合った。「この子はまだ小学校5年生なんや」と言って絶句し泣き出した。声を殺して横を向く、廊下に出すが寝かせてやる場所がない、ロビーの会計前のすみに寝かせる、その子のおじいちゃんが素足のまま震えながら私に「診たって下さい、診たって下さい」繰り返し訴える。「もう死んでるんよ」と優しく言って処置室へもどろうとすると、左足首を骨折していると思える40才位の男性が「看護婦さん」と呼ぶ。「待って下さい」と言って処置室へもどった。

12~13才の女の子、もう死んでいる。まだ若い女性と廊下に若い男性が戸板の上に寝ている、診ようとすると思えば横で「もう死んでいるんです」と抱きしめたまま、乾いた声で言った、つらい。

応急処置を何人したのだろうか、死体をかたず

けないと、もう動きが取れない。職員も次々かけつけて来る、5西がつぶれていると聞いた、古谷Drが5西へ助けに行くと言いに来る。それから死体安置所に設定したリハビリ室に遺体を運ぶ、リハビリ室は遺体で一杯になったため内科外来に安置所を増やす、主として子供はそこに運んだ、すぐに一杯になったため2階の会議室に、そこもすぐ一杯になったため泌尿器外来の中に男性成人、廊下に男の子を安置した、次に耳鼻科外来につくった。

救急外来にベビーが母親に抱かれて来た、冷蔵庫の下敷きになったと、頭がへしゃげている、すでに死亡している、内科外来の遺体安置所に抱いて行くと母親がすがりついて来て「この子は今日が1才の誕生日なんです」と母親を抱きしめたら初めて涙があふれて来た。

内科外来で、大野NSも泣きながら紙に名前と住所と年齢、死亡確認時間を書き込み、遺体に貼っている。看護婦も医師も放射線技師も事務員も、患者の家族も死体を運んだ、一体何人運んだのだろうか。

業務員の三木さんが倒れるように出勤して来た、病院の惨状を見るや予防着を着て働き始めた。医事の女性事務員に死亡者リスト作成を依頼、みんなそれぞれの場所で精一杯頑張っている。処置室はまだ患者で一杯だ、見ると足首を骨折しているらしい男性はまだ同じ場所で待っている、シーネを当てて包帯で固定する、今はこれで手一杯、処置の一応済んだ患者が処置室に一杯いる、レントゲン室の前やCT室の前、胃カメラ室、ベッドを作って患者を収容している、内科のDrが手があいた時に診にまわっている、総婦長が電話で入院患者や重症患者の受入れ先をさがしている、重症患者が他院へ搬送され出した。

院内は非常灯が細々と灯っているだけ、ナートは懐中電灯のあかりでしている、日が暮れたらどうなるのか、処置室にもどると手洗い台の影に老婦人が横たわっている、朝7時30分位にはもういた婦人だが、座ったり寝たりしていた

ので重症と思われず、アピールする家族もいなかったため後回しになっていた、診ると全身やけど、黒く焦げ、3度火傷、びっくりして「全身やけどの患者がいる」というと、すぐ喜多島Drと半崎さんがかけつけて来た。皮膚科の和田林Drが来たので皮膚科で処置するため運び出した、後で総婦長から搬送中に救急車内で死亡したと聞いた、もう少し早く気づいたらと悔やまれる。

「5西の患者が2人飛び降りようとしている」と青山助産婦が顔をひきつらせて救急外来に走って来た、古谷Drが飛び出して行った、私は処置中で行けない。

すさまじい死体が次から次と運ばれて来た。胸部を強く圧迫されたのだろう、顔面に強いうっ血のある女性、ふとんの中で強く圧迫され押しつぶされた中年の女性、もう涙は止まっていた。

強い疲労と空腹なのに食欲がない、言い様のない喪失感があった。日が暮れると患者は来なくなかった。両手は血まみれ、涙も枯れた。栄養士さんがバナナをくれた。DrもNSも1本ずつバナナを食べて注射用蒸水を飲んだ。今日初めての食事なのに、全員にあたっただろうかと業務局の三木さんが気を配っている。狭い看護婦当直室に折り重なるように、汚れて疲れて傷ついたNS達が身を横たえている、血まみれの処置室に看護婦十数人とDrが数人椅子に座って仮眠を取っている、みんな疲れ果てているが眠れない、廊下に喜多島Drがパイプ椅子に腰掛けている、ストレッチャーの上で毛布もなしで内藤Drが仮眠している、かなり寒い。毛布をかけてまわりながら、これが本当にあった事か、と繰り返し考えていた。



ライフレベルと傷病部位のチェック優先順位を決めた

中央材料室 永田玉美

5時46分頃、神戸に住んで初めてのすごい地震であったが住居は特に変化なく、病院の異常は想像できなかった。情報を得ようとラジオを聞いても、震度のことだけで状況は何もわからない。非常時の電話連絡網にしたがって連絡があるかも知れないと考えていたが連絡はなかった。明るくなりいつもの時間に出ると電車が不通で、9時出勤の私は3連休後の物品受領と供給を予測し、遅刻してしまうと電車を歩いた。菊水山駅あたりに来ると、太陽は赤く山越に黒い煙が見え、少し不安を感じ走り出した。鶴越を過ぎ丸山に出ると、黒い煙はいくつも東から西へ大きく立ちのぼり、ススが飛んできて顔にザラザラと感じる。胸がドキドキとして更に速く走る。大きな建物に遮られて病院が見えない（普段も見えないから当たり前なんだけど）、それでも救急車、消防車のサイレンと緊張の為、更に動悸を感じながら房王寺の健在である朝日病院を横目に見て、長田へ走り下った。途中で「西市民がつぶれている」と聞き、少し力が抜けたが見てみないとわからないし、佑康病院の横から大開通りに出て、病院を見ると一部ひしゃげていたけど、つぶれてはいず、安心した。

8時40分頃、途中での状況から多数の傷病者が予想され、正面玄関から入ると多くの人々が来ていたが、けがをしているようではなかったので、処置室に行く。あらゆる所に人々が横になっている。もうすでに来ている看護婦、医師が血管確保、縫合、蘇生をそれぞれ行っている。それでも次から次へと患者が運ばれてくる。その患者のライフレベルと傷病部位のチェックをして優先順位を決め、処置の為の準備をして医師に依頼する。予防衣を着た人が医師とともに来るので不信に思ったが（顔に覚えがないのと、私自身予防衣をつけていなかったのが看護婦とはわからなかった）、前額部から後頭部にかけてジグザグに挫創のある患者さんの皮膚をよせ

ナートできるように介助しているのを見て、ああ看護婦なんだとわかり、彼女にまかせる。患者が入りきれなくなり、亡くなった患者さんをリハビリ室に搬送するとともに、救急玄関に布団にくるまったまま、または戸板や網戸、たたみに乗せられてすぐ処置を必要とする患者を整形外科に搬送する。往復している間に在宅酸素患者のボンベを確認し、業務員の三木さんにボンベの供給を依頼し交換する。スタッフが患者さんにそれぞれすぐ処置ができるようだったので（人数と場所的に）、私は、点滴やバルン留置の患者もいたので転送のための申し送りや、災害でもあるので姓名確認のためカルテをつくり、主訴を聞き意識の確認・傷病部位の観察をして診察の依頼、慰安とともに安楽の援助をする。まわっていくうちに手術の必要な患者や変化が早そうな患者がみえてきて、転送を依頼するため受け付けの看護部長さんに報告する。けれど病棟転送の件もあり、看護部長さんの指示にて、電話で社保中央病院、国立神戸病院などへ転送依頼をする。整形外科患者の転送では、そちらのブロックを把握していた松原NSに連絡をとり優先する患者を決定し、受け付けに報告する。レントゲン室にも患者がおり、北里婦長さんが把握しておられるようだったので、私は内視鏡室の5人、その前の在宅酸素の1人、救急トイレ前の3人を受け持ち、カルテ作成処置記録して状況が誰でもわかるようにする。受け付けに行き、転送の状況を見たり、連絡することもあったので、大野NS、生口NSにも受け持ってもらう。病棟患者の転送が始まり、搬送を手伝う。その間に外来患者の優先順位を医師に決定してもらい救急玄関に搬送する。搬送された後に病棟のベッドやストレッチャー、車椅子が残り玄関におかれたまま（出入口は一方通行の状態）で、中では転送を待っている患者が床に臥床している。そこでそれらを歩道を通して正面玄関より入れていると、庶務の小沢さんが手伝ってくれる。

18時頃、転送用の車がぞくぞくと到着するの

で搬送する。中央保健所のワゴン車が来るが医療者の同乗を求められ、独断で乗り込み、震災後初めて橋を渡って中央市民病院に行く。その途中東の空に赤い満月を見ながら、3回6人の患者を搬送する。途切れのない西行きの車の列を横切る為に車外に出、車を止めたり早く搬送するため歩道を走ったり、元町のアーケードを走る。患者搬送が終わり、車を離れようとしたら、遺体搬送を依頼され村野工業高校に3回7遺体を搬送する。満月はやはり赤く、真上にあった。

23時頃、皆、看護婦控え室にグッタリと横になっている。私も救急処置室入口近くに重ねてあった布団に座って仮眠する。夜間患者が来たが小椋NSが中心に対処してくれたそうだ。1月18日、5時頃、外はサイレンの音、煙、焼ける匂い、そして西の空に満月があった。

骨折患者で足の踏み場がない

整形外科外来 松原睦美

子供の「地震だ」という声と同時になぐられた様な衝撃と共に、気がつけば食器棚の下敷となり電気は消え、何が何だか解らなく茫然としていたら「すぐガス栓しめろ」という声が聞こえましたが、家族がそれぞれ箆笥等の下敷きになっており、動こうにも動けず、やっとの思いではい出し、ガスの元栓をしめて、外に出ました。強烈なガスの臭いに危険を感じ、すぐ近くの小学校へ行く途中火の手があちこち見えており、近くの家はほとんど倒壊し声を失いました。家族全員家具等の下敷になりましたが軽い怪我ですみ、全員避難後病院へ行く。

外から見ると5階が潰れており、正面玄関を入ると人であふれており、すぐ整形へ行くと整形物品は散乱しており、窓も壊れ床は水びたしの状態で、1診と3診と廊下も畳と戸板に寝た人が椅子も机もベッドもあらゆる所で一杯であり、私服の上に予防着をつけ、端から「どこが痛みますか」と聞いて廻り、痛い所に家族にそ

れぞれ湿布を貼ってもらう、全員骨折と思われる状態でした。「先生はそのうち来られるから、痛い所に湿布を貼って安静にして待っていて下さい。」と言うと、「先生はいつになったら来るんや」と次々叫んでいました。2診は水びたしなので「付きそって動ける人、床を拭いて下さい」声かけ、拭けた後、救急で使ったシーツを敷き、廊下の患者さんに次々入ってもらったが、収容しきれませんでした。他科のナースの応援が来られ、予防着を渡し手伝ってもらいました。

湿布がなくなった頃、段ボール1箱薬局より来ました。「出血している人いませんか」声をかけて廻ると1人開放性骨折で出血している人があり、ガーゼ弾力包帯をすると浅雄先生が来られ、すぐ点滴と指示出るも点滴セットなく、外科へ取りに行こうにも通れず、救急へDrが取りに行き、他科の看護婦と点滴されました。

長岡先生が来られ診察をして廻り、骨折部位にソフトシーネと弾力包帯、トラコバンド等で固定をし、ソフトシーネがなくなったので整形用パンフレットをシーネの代わりに固定し、弾力包帯しました。Drより「うちは病院として機能してないので、他の病院へ早急に送りますので待って下さい」言われ、患者に順番つけて救急受付へ申し出ました。そのうち数人の患者さんが尿意を訴え、尿瓶も導尿セットもなく、すぐ導尿セットを救急へ取りに行きました。男性はナイロン袋を渡し「その中にして、袋の口を結んでおいて下さい」1人の患者さんは血圧が高く「朝より薬飲んでないので頭が痛い」と訴え、血圧を測ると220/140でした。先生に報告しアダラート舌下しました。そのうち自家発電の電気は消え、懐中電灯つけながら患者さんの状態が悪くなってないかどうか先生と廻り、そうしている時でも次々患者さんが増え、足の踏み場がなくなりました。収容してくれる病院が決まるとストレッチャーで運び、ストレッチャーもなくなると畳とか戸板のまま玄関まで送り、足等の骨折の人は、車椅子がないので車のつい

た椅子で搬送しました。整形と外科の患者全員搬送した後、年老いた母が気になり、いったん避難場所へ帰りました。

縫合セットがなくなり薬液消毒して使用

外科外来 宮ミネ子

そろそろ起床しようかなと思っていたら、突然ガタガタと音がすると同時に建物が大きく揺れ、家中の家具（タンス、本棚、食器、テレビ）等が倒れ、食器が割れる音がした。私は恐怖のあまり震えて動くことができなかった。近所が騒がしくなり、団地の住民がドアを叩いて「宮さん大丈夫ですか？」と声をかけてくれ我に返りホッとす。団地の皆さんと一緒に避難場所の学校へ行く。学校の校庭には大勢の人々が避難しており口々に恐かったと話していた。地震が起こった時は一瞬死ぬかと思った。魔の17日の5時46分だった。

地震がおさまり、皆それぞれの家へ帰り私は病院へ電話を入れる。電話に出てくれた方も忙しそうにしており病院も怪我人が大勢来院されて大変忙しいとのことで、出勤できる職員は出て来て欲しいと言われた為、支度をして自家用車を運転して出かける。家の中はメチャクチャになっていたが、ほったらかしのままにする。

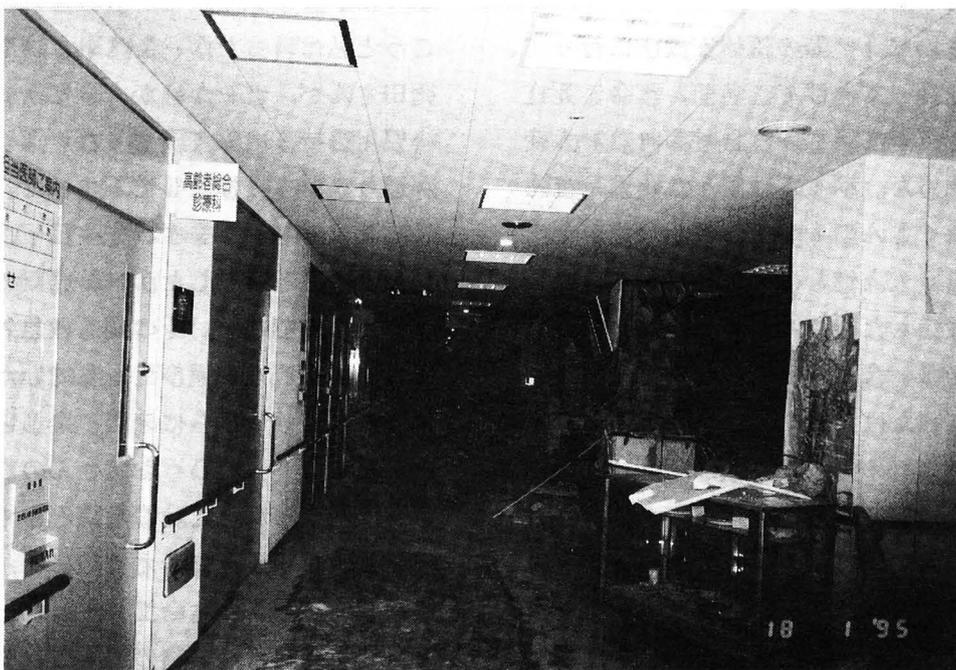
途中の道路は所々陥没していた。多聞台付近

は家の屋根瓦が落ちていたが大したことがないと思いながら運転して、離宮公園近くからなかなか車が進まず月見山では家が倒壊しており、地震の凄さを目にした。途中、道路は迂回したり火事であちらこちらの家から煙が出て映画で見た戦後のシーンそのものだった。車を運転していても恐怖心で一杯、命がけで病院に駆けつけた院内は、被災された人々が入口から救急処置室待合いまで一杯でした。受付に看護部長さんがおられて出勤したことを報告する。外科外来に行くのと外科Dr、主任さん、半崎NSが怪我の介助をしており、私も参加する。次々と怪我人が搬送され縫合セットはなくなり、薬液消毒して使用する。まるで野戦病院の様でした。アッという間に時間は過ぎておりました。停電と水道も出なく不便な処置介助でした。2時過ぎに皆と話す事が出来、それぞれの被害の状況を話し合う。生まれて初めての経験をした。本当に恐ろしい出来事だった。

引き続き、当直したため子供がいくら電話をしても連絡が取れなく心配していたと、上司の方より私が帰宅してすぐに電話が有り、家の家具などが倒れたと状況を説明する。上司の方は理解してくれ、子供にその旨を告げてくれる約束をして電話を切った。私は

疲れた体で家の片付けをする為に、近所に住んでいる姉に電話をして来てもらい片付けを始める。

夜中の2



本館2階内科前 この奥が遺体仮安置所となった

時過ぎまでかかったが、一部屋だけ片付け寝るスペースを確保した。

2度と起こってはならない天災だと思います。でもこの状態から1日でも早く立ち直る為には、日本中の人々の努力が必要だと思います。私も頑張りたいと思います。

遺体安置所でしっかり手を握ってあげた

中央材料室 大野良子

平成7年1月17日当日、目の見えない主人のために、大急ぎで応接間、玄関、台所のガラス破片などを段ボール箱に拾い、トイレへの足場も作って、「動かずに座っていてね」と言って、歩いて病院へ急いだ。途中、ヒッチハイクしたかったが勇気がなかった。救急外来へ着くと、これは大変なことだと思った。まるで地獄だった。手当たり次第に心マッサージ、縫合介助と、状況判断をする余裕がない。亡くなられた方を2階へ運ぶ時、廊下にうずくまる人がガウンのすそを引っ張って「息苦しい、先生呼んで」…という言葉が耳について、亡くなられた人を悲しむ余裕はない。

看護部長さんに「2階の遺体安置所に行って、しっかり手を握ってあげて、名前、年令、死亡時間を記入してきて下さい」と言われた。大変な作業だと思った。ベッドに置かれた人はほんの数人で、たくさんの方が床に置かれていた。1人、2人、3人と進むにつれて肩が疲れた、大きな深呼吸をした時、内科の小椋さんが「大野さん、この子、今日が誕生日なんだから…」と、1才になったばかりの赤ん坊を毛布にくるんで連れてきた。のぞくと左頭部がへっこんでいる、思わず「何で…」と涙が出る、小椋さんと2人で泣いた。次々と運ばれてきて、出来る限り、毛布、敷布、バスタオルとある物全てを使って置いてあげる、私の仕事がなかなかかどらない。「この子の姉がどこかに居るから、その横に寝かせてくれ」と哀願するおばあちゃん、

どうやってその横まで連れて行こう、と頭がパニックになる。おばあちゃんは、孫が「今日ジョギングするから早く起こしてね」と言われて、起こそうかと思っていた時に地震が来たと言う。なんで自分が生きて2人の孫が助からないのか…と、私の胸をつかんで言われる。外の待合室から「だいすけガンバレ」と大きな声が飛び込んできた。男の人が2人で子供に人工呼吸をしている。そばにあった（今それが何だったのか思い出せない）肩下に入れて、気道を開けて手伝う、3才のだいすけ君、お父さんが心マッサージし、おじさんがマウスにマウスをして、「だいすけ生きろ、だいすけガンバレ」と、一生懸命だ、口唇の色も…、私も助かるような気がした。死亡診断書を書いていらしたDrが通りがかり、聴診器をあてて、「大丈夫そうだ」と言われ去った。その後、内藤Drが通りかかったので「先生ちょっと診て下さい」とお願いすると、「挿管しよう」とおっしゃった。内科外来の救急カストを探し、倒れて散らばっている引き出しをかき混ぜ探すが、大人用しかない。吸引したいがそれも出来ない、もどかしかった。OP室の岡田さんが通りかかって探して下さったが、小児用がない。救急外来へ連れて行こうと私は言ったが、Drストップがかかった。岡田さんが、どこからか大きなケースに入った小児用を持って来て下さった。運よく麻酔のDrが通りかかって挿管して下さった。内藤Drが「ここは僕がやります、先生は下へ…」と、30分以上人工呼吸をしたが、結局だいすけ君は助かりませんでした。その間も救急外来では次々と、大変な人々が運びこまれていたのです。私は「だいすけこっちにこい、楽しいことが一杯あるんやで」…というお父さんの声をふり切ることが出来なかった。看護婦として、これで良かったのか、と後で考えてしまった。だいすけ君はわずか3才の生命だったけれど、お母さんはだいすけ君の妹か弟の出産のため、実家の加古川に帰っているとのことだったから、今頃はきっとだいすけ君の生まれ変わりとして、元気

な赤ちゃんが誕生していることでしょう。

自分の仕事が進まずに困っていると、山本婦長さんが見えて、「大野さんどこまでいった」と助けに来て下さった。本当にホッとしました。

夕方暗くなって、北里婦長さんに、内視鏡室の患者を責任持ってみるように言われた。5人の方が入れられていた。付添いのいる人は1人だけで、頭を打って目が痛いと言われる。脳外のDrが診て下さった。

胸を打って、体動もままならぬおばあちゃんは、足先が冷たいと言われる。毛布やバスタオルでくるんで暖をとる。そのうち、おしっこがしたいと言われる。動かせないで、バルンを入れることにする、ほとんど手さぐりで救急外科から物品を探していざ入れようとするが、懐中電灯の灯りではさすがに難しい。尿道口を探すのは自信があったのだが、2回目にやっと入った。「生き返ったようだ」…とおばあちゃんは喜んでた。

腰痛を訴える若い女の方は、母子家庭で、男の子2人が家にいると言う。自分は新聞配達途中、ガレキの下敷きになったと言う。内視鏡室の電話でもしやと思って連絡してあげたが、やはり駄目だった。かなり痛くて寝返りも出来ない、インダシン座薬を入れてあげた。

一番奥のおばあちゃんは、弱々しい声で「先生お水を少しください」と言われる。聞くとDMでオイグルマンを飲んでいると言われる。低血糖になったら…何か食べる物をと探したら、枕元におみかんが置いてあったので1個むいて食べてもらった。家の人がおにぎりを取りに家に帰ったと言う、鈴蘭台だと言われる、「これはいつ帰って来られるかわからないなあ」と思った。

一番元気な男の方は、色々家のことや仕事の話を話して、明るくしようと努力していらしゃるのが感じられて、本当に痛々しいと思った。私も努めて明るく声をかけて、転院の順番を待った。

受付では、看護部長さんや永田さんが一生懸命、

それこそ必死の状態を受け入れてもらえる病院を探して下さっている。「自分も頑張らない」と思った。

頭を打った方を一番初めに、全員が転院先が決まった。あの家族はおたがいに逢うことが出来たのだろうか、と考えたのはずっと後になってからである。

不安を与えないよう看護婦を配置した

6 西病棟婦長 新家和子

忘れもしない1月17日の未明、突然に襲いかかった地震。私はその時布団の中でした。あまりに大きな衝撃にただ布団をかぶり、子供に声をかけるのが精一杯でした。揺れが止んだ時、頭の中をよぎったのは「長田は大丈夫か」という想いでした。すぐ勤務者を調べ、病院に電話を入れました。最初の電話では「何とか大丈夫」という返事でしたがとても気になりました。散乱した家の中を片付け、子供を安全な場所に置き、もう一度病院へ電話を入れました。その時2人部屋の壁が壊れ、患者がはさまれていることを知り避難させようと思っているという、主任の言葉が飛び込んできました。応援は来ていないということだったので、すぐ細田寮の寮生にTELしましたがもうつながりませんでした。家の電話も不通になり、電気も全て消えていたので、大変なことになっているのでは？と一刻も早く病院へ行く必要を感じました。子供を友人に預け、7時頃家を出ました。出たものの、交通手段はもう何もありませんでした。友人が車に乗せてくれましたが、妙法寺あたりで全く動かなくなり、人々が街にあふれ、ただならぬ気配でした。もう一度家に引き返し、今日は帰れないかも知れないと伝え、再度ほとんど歩く状態で病院へ向いました。長田に近づくにつれ、多くの火柱、黒煙が上がり、戦争も知らない私が「空襲を受けたみたいだ」とつぶやいていました。家が軒並み倒れている現状に、病院はどうなっているのだろうと不安で一杯でした。そ

れでもどうやら病院へたどり着きましたが、玄関へ一步入るとまっ暗な中に、ただ人、人、人…でした。みんな必死で応急処置にあたっていました。5階が壊れていることもこの時知りました。6階の患者はどうなっているのか、すぐ6階に上がりました。患者さんはもうほとんど2階、3階に避難していました。夜勤看護婦から事情を聞き、まず患者の人数確認を行いました。そして一人一人確かめ、状態について声をかけました。以後は看護部長の指示のもとに5階、6階の入院患者を確認しましたが、患者が入り乱れていたため、思いのほか時間がかかりました。かけつけた看護婦はかなりいたので、入院患者にこれ以上の不安を与えないように看護婦を配置し、今の安全を守るよう指示しました。

転送させることとなり、重症者から転送の準備を行いました。ほとんどの患者が私物を持ち出すことが出来ておらず、一部の人から「入れ歯をとってきて」「通帳を持ってきてほしい」と言われ、一度は6階へ上がりましたが、1人の力では何をどう持ち出して良いかわからず、又5階の人もまだ助け出されていないことを考えると、結局何も持って帰ることなく下へ降りて行きました。とても虚しい気持ちでしたが、どうしようもありませんでした。今思うと、もう少し冷静であったなら…と後悔しています。

少し落ち着くと、まだ院内に残っている患者さんのベッド作りを行いました。とにかく入院患者さんに保温を含め、安全に休める所を！と病棟看護婦で手分けして行いました。そんな途中で外来の処置を手伝ったり、遺体搬送を手伝ったり、自分が何をしているのかよくわからなくなることもありましたが、とにかく出来ることを出来るだけしようという思いでした。一方で、部長の指示された行動をしていたように思いますが、指示されると本当に行動しやすかったように思います。

一連の行動の中で感じたことは、非常に連携

プレーが良かったということです。若い人も含めて本当によく動いたと思います。みんなで一所懸命頑張るという連帯感のようなものが生まれていると思います。

災害対策には全く慣れていない私達でしたが、頑張れたという想いも残ったのではないのでしょうか。多くのものも失いましたが、得るものもあったと思います。



新館5階から見た本館
5階の上半分と6階の床が見える

5西患者の救出、ロープで引き上げる

5西病棟婦長 永井満喜子

平成7年1月17日(火)AM5:46の阪神大震災は、まるで悪夢でした。私は丁度起床したところでしたが、家の中は停電しステレオはひっくり返し、本や食器が飛び散る強い揺れでした。幸い家族は無事でしたので、すぐ病院(5西)にTELしましたが通じません。そのうち大西主任がTELをしてくれたので、病院への連絡を依頼し出勤できるかを聞きました。家からは電話が通じないため公衆電話に並び、やっと救急受付に連絡がつけましたが5西病棟が閉ざされているらしいことを聞き、すぐ近くにいたタクシーに頼んで行ける所まで走ってもらうことにして、西神の自宅から病院に向かいました。

須磨のあたりから家屋の倒れや崩れがひどく、道も混雑して車が進みません。長田に近づくと火事で炎と煙が車の窓に迫り恐ろしい状況で、交通規制の間をくぐり病院に着いたのは10時半を過ぎていました。

救急入口は次々に運び込まれる患者さんで混雑し、暗い中で必死の処置が行われていました。出勤したことを看護部長に報告し、すぐ5階に走り既に駆けつけてくれていた4～5人のスタッフに状況を聞き、病棟全体が埋まっていることを認識しました。古谷先生、萬代先生方が救出場所を探して下さっており、数名からの応答が確認されたところでした。気持ちを落ち着け、私も埋まっているナースの名前を呼びながら5階の周りを探しましたが応答はありませんでした。前日の準夜勤務者と主任の協力を得て、5西の患者の配置図を書き患者名と人数を確認しましたが、3日間の連休で土曜日入院と救急からの転入や急な退院・外泊があり、在院患者の正確な把握に手間どりました。5西患者の救出が私の役割と思い、看護部長と連絡を取りながらスタッフと共に救出作業に集中しました。そのうち6階北側の窓より自力で出て来られた患者があり、その窓より救出できるのではと、職員倉地さんや萬代先生が懐中電灯やロープを持って入り、私たちがロープを引き上げて2名が脱出できました。5東側からも古谷先生や病院職員の人の力で次々と5名位が救出され、4階の仮眠室に移して着替え、毛布で温め、医師の診察を受け、重症者は転送を救急受付に依頼していききました。ナースも業務分担して動き、救出された人の氏名、時間を確認し、私は看護部長に報告していききました。しかし職員の力では限界があり、早く消防隊・レスキュー隊が来てもらえないかと、もどかしい思いでした。患者の家族は心配の余り「何とかならんのか」と騒ぎましたが、祈るような気持ちで待つしかありませんでした。消防隊の到着は13時頃で、それから安達さん、田中靖さんがまた30分位遅れて藤浦さんと3人のナースが5階の新館渡り廊下より救出され、無事を喜び合いました。その後多くのレスキュー隊の応援で、次々と患者さんが数ヶ所より助け出されました。スタッフも機敏に心を1つにして働きました。一方では未だ連絡の取れないスタッフの無事を確認してい

きました。病棟南側の5070～5071号の救出口がなく、夜暗くなっても作業が続き、助け出された患者さんは皆、重症で衰弱しきっていました。中でも22時10分に救出の笠井さんは腹部～下肢にかけての圧迫時間が長く、危篤の状態に医師2名に付き添ってもらって救急車で中央市民病院に転送されました。47名のうち46名が救出されましたが残る長尾さんだけが見つからず、最後に採血した安達NSは消防隊に何度も中の状況を聞かれました。その日の救助は打ち切られましたが御家族の気持ちを思うとつらい夜でした。家や家人の無事な患者は退院となりましたが、それ以外の方は3階～4階の廊下に敷いたふとんで休んでもらい、2名ずつのナースが交替で看護することにしました。1月18日は全員が転送か退院となりました。患者、長尾さんが自衛隊により6階の詰所の前から搬出されたのは1月18日21時30分で、わずかな期待は敗れ圧死の状態に顔は紫色にうっ血し、下肢の皮膚がめくれ、震災の悲惨さが伺えました。多くのナースが丁寧に処置してくれ、藤浦NS、安達NSと共に御見送りしました。御家族に副院長から説明されたのはその後で、日付は1月19日に変わっていました。

このように救出までに時間を要したにも関わらず、犠牲者が少なかったことが不幸中の幸いでした。救助に関わって下さった多くの人々に感謝しています。

無我夢中の時間でしたがスタッフに支えられ、心を合わせて共に過ごした時間でもありました。後から思えば記録したメモを紛失したり、計画行動も取れたと言えませんが、多くのことを学び体験したように思います。そして「西市民病院はもう無いのだから」と自分自身に言い聞かせています。



透析ができない

透析室婦長 北村雅子

今、振り返って自分の行動をみると、あの揺れた時から今もお冷静さを失っていると思う。

自宅では大揺れに揺れて覚醒し、地震だと分かり揺れる中を停電しているのに周辺のコードを這いまわって抜いた。2階から降りようとしたが、部屋の入口のノブが破損して出られなかった。幸い下は何事もなく、父がベランダの入口の錠を開けてくれたので窓から出て1階に降りたのでした。

明るくなってきて外を見ると自家用車だけが動いていた。停電でJRが動いていないがどうしてバスが動いていないのかとおかしいと思い、バス停まで行った。いつも沢山いるのに1人もバスを待つ人がいない。いやに静かで家に引き返した。その時どこともなく地面からガス漏れの臭いがし、近所の家の屋根が潰れているのを見た。そして水、電気がもしも病院でも止まっていたら透析はできない、大変なことになると車通勤は禁止されているが今日は仕方がないから車で行こうと決心。

途中、親しい友達の家の様子を見に寄ったところ、やはり断水していたのでこれは困ったことになったと思いつつ病院に向かう。信号も消えて交差点は目で確認しながら走る。崖崩れ片側通行になっていた所もあり、トンネルが3か所あり今揺れたら一巻の終りだと思いつつ走る。月見山で東行きがストップとなっており、2号線に出る。これはどうなっているんだと心で叫んだ。高速道路の支柱がグニャリとなっている、反対側で火事の炎が見え車のガラスを通して熱気が伝わってくるのに、人も消防車も見えない。

病院の近くまで行くと、ベランダの崩れているのが分かった。でも5階が潰れているのは気がつかなかった。警官に「東は行けない、病院に行くならそこらへんの道に車を置いて行け」と言われる。兵庫駅近くの車を買った会社の山側道路に車を置き、病院に向かう。潰れた家が一杯あり、「どうして」と思いつつ歩く。

西市民病院に入ると異常事態になっていて信じられない光景で、私服の上に予防衣姿の松本さんがいて、担架で患者さんを運んでいる荒巻さんを見ました。私も私服の上に白衣だけはおって救急外来に行くと小椋さんがいたので私は何をしたらいいかと聞くと、5階が大変、飛び降りようとしている患者さんがいるから行ってほしいと言われて5階に向かう。新館で岩崎婦長と会って2人で5階あたりでいると山本婦長から「一度集まるように」との看護部長の指示を伝達されて1階に集まった。

「透析患者さんは和中さんが西神戸医療センターへ連れて行きました」と部長から情報を受けてホッとしました。これからどうしたいかと尋ねられ、各婦長の役割が確認された。私自身は7階の透析室を見届けたい気持ちが強くて今すぐ西神戸へ行くべきとは考えたが、5階へ行きますと申し出た。

藤本婦長と東の非常階段で4階、5階、6階と見て回った。4階では5階から「助けて」と声が聞こえ「助けに行きますから頑張ってください」と声掛けをする。5階では5西の看護婦達が閉じ込められた患者さんを救出しなければとの悲壮感が漂う中で患者数の確認がされていた。6階では患者さんが1人だけ残っていて、2階リハビリ室までの輸送に男性のカメラマンの手を借りて、6階から新館5階への段差を越えて運んで行きました。その後、6階の窓から5階の窓へロープづたいに2人の患者さんを力を合わせて引き上げて救出しました。しかし、これ以上は専門家でないと道具もないので無理だとの雰囲気、永井婦長はじめ看護婦の手もあるようなので任せることにしました。

私は透析室を確かめずにはいられなくて7階へ行きました。入口の棚が転倒している上を越えて透析室に入りました。カウンター、透析機械も倒れていました。西神戸で透析するとしたら記録類があると、散乱した書類の中でカードックスを捜しましたがないので、和中さんが持って行ってたとわかり聴診器2つだけポケット

に入れました。看護婦室には入れませんでした。

1階へ降りて行くと、救急玄関の風の吹きさらしの中で、入院中の透析患者さん3人が座っています。「迎えに行くからここで待つようにと和申さんから言われている。」とのこと。西神戸へ電話を入れましたが音声小さく通じません。看護婦から「透析看護婦の藤尾さんから3人を頼まれたが送りますよ」と声かけられて、患者さんの意志を聞きますと、透析導入して日の浅い方ばかりですが2人は外泊可能の体力で、家へ帰りたようでした。でも家とは連絡が取れないのでした。古谷先生に転送入院の可能性を尋ねたところ、よほどの重症以外はだめだと言われ、自分の車で連れて行こうと思い、道順を考えていたところへ衛生局の方が座れる患者3人運びます、と公用車で来られました。どんなに嬉しかったことか、今も思い出すと涙が出ます。1人はUKカテが挿入されているだけでなく、循環器の合併症や精神的な問題もあり車椅子でした。「私も行きたいのですが」と申し出て快く承諾いただきました。

道路は陥没し道は渋滞し、3時間位かかったと思いますが、無事に西神戸に着きました。途中でトポスの1階が潰れていました。生き埋めで救出された瀕死の若い女性をパトカーで神大へ運ぶという声が、車の外から聞こえてきたのが今も思い出されます。

私はもう一度病院に帰るつもりでしたので、衛生局の方は帰る時に声を掛けて下さいました。しかし、入院の手配なく来た私達は、これから交渉しなければなりませんので時間がかかりそうでしたし、和申さんとも連絡しなければと思い、又、道路状況から往復は無理と考え、私は残ることにしました。非常時とはいえ、いや非常時だからこそ上司に断りなく出かけたきりとなり、今も心にひっかかっているのです。あの時一言「行って来ます」「行ってらっしゃい」と言えば脱走兵のごとく後ろめたさを感じることはなかったと残念でなりません。結果からは、予定通りに一旦は西市民病院に帰って

報告指示を受けて、自分の車で西神戸医療センターへ行けば良かったのにと後悔しています。

西神戸では高田婦長をはじめ、病院全体から物心両面での心温まるケアを受けました。まず3人の患者さんは無理を言ってすぐに入院させていただきました。その後3階の透析室に行くと、火曜日の患者さんはもう透析に入っていました。看護婦は藤尾さん、中野さんが私服の上に予防衣姿で業務していました。「スタッフが働くということで患者さんを受け入れてもらった」との和申さんのお話に納得しました。

本館を見て西神戸に来た私は、長い間、当たり前として存在していたあの西市民病院の透析室は、今はもう無いのだと自分に言い聞かせました。そして患者さんを受け入れて下さったご好意に業務を通して誠意で応えるのが自分の果たすべき事だと自らを励ましました。

無我夢中でその後過ごし、センターの田中さんに「お疲れさま」と笑顔でねぎらいの言葉を受けて3クールでオフとなりました。私と藤尾さんは仮眠室で休みましたが、田中さんをはじめ、後藤さん、小阪さんのセンターの看護婦さん達は4クルールの勤務だったのでした。

付記

1か月を経た今、このままでいいのだろうかと思う。1日でも早く復興するため、西市民病院の透析看護婦として何かできることはないのか、と。

ガレキをかきわけて患者を救出した

庶務課 野津敏朗

1月17日未明、地震発生の時、救急当直仮眠室で仮眠中であった。仮眠室のドアをふさいでいた更衣ロッカーを引き起こし、救急診察室へ入ると、当直医の郡山内科部長と出会った。

同部長と相談の上、入院患者に1・2階へ移動してもらうことにした。その作業を、3階東西病棟、南館3階病棟、4階西病棟と行い、5階西病棟へ行こうとしたが、5階がなくなって

いた。(5階は、6階の崩落により押し潰されていた)。

止むを得ず迂回して、6階西病棟へ行こうとしたが、新館と本館の間に段差が出来ていた。地下の監視室から脚立を持ち込んで足場とし、更に、ストレッチャー等を足場代わりにして、6階の患者を新館5階へ降ろした。その後、本館東外部階段から5階東病棟へ入ると、5階が西へ向かって落ちているのがわかった。

その場へ、友人の父親が5階西病棟へ入院しているので、様子を見に来たという薫職らしい若い2人連れと一緒に、ガレキや倒れたロッカー等を取り除きながら、寝そべった状態で、少しずつ5階西側へ入って行った。

放射線科の葉田氏もやってきて、協力して5階西病棟の一番南東側の病室から、高齢の女性をまず一人救出した。その間、何度か新館の救急事務室へ行き、レスキュー隊の出動依頼をするようマヤターミナル社員へ伝えた。

午後12時過ぎには、警察機動隊・消防レスキュー隊(名古屋・桑名)が30~40名やってきて救出に加わった。私は4階西病棟のベランダ、5階西病棟北ベランダから様子を見て廻り、声をかけて反応があった場所は、機動隊、レスキュー隊に知らせ、救出を頼んだ。この日、最後に救出された患者は全て大きなケガもなく、詰めかけた家族、病棟看護婦と喜び合っていた。

翌1月18日は、残った1人について、消防レスキュー隊(京都)が9時から6階西病棟の床にブレーカーで穴を開けての救出作業を大成建設の協力で行ったが、ダクトや配管類がじゃまして、作業はなかなか進まないし、救出もできなかった。6階西病棟の南側廊下を、西から順に穴を開けて隊員が潜り込み捜したが、見当たらない。地震当日の5階西病棟当直看護婦に、当時のことを聞いたところ、詰所で採血を終え、廊下へ出た直後(30秒~1分後)に地震になったとのことだった。そこで、30秒程度で歩ける範囲を想定し、更に東側(詰所寄り)に穴を開けて捜したところ、午後8時30分頃に発見した。

遺体を引き上げたのは約2時間後であった。この作業には、消防レスキュー隊(京都)・自衛隊が当たった。

持ち場を分担し必死に動きまわった

外科系外来婦長 北里宏子

大きな揺れを感じてすぐに目が覚めた、とっさに布団をかぶり頭を抱えた。ガラスのようなものが砕け散る激しい音が続く。揺れがおさまる布団から抜け出すと室内は足の踏み場もない、懐中電灯はどこかへふっ飛んでしまった。手さぐりで玄関まで歩き靴をはいた。外は周囲の建物は特に異常ないように思えたが、あたり一面ガス臭かった。

すぐに一筋、裏の木造住宅に炎が上がり燃え上がった。火の粉が風に乗ってこちらに迫ってくる、もうダメかと思った。この火事で近所の人6人が亡くなった。とにかく“情報”をと、車のラジオから事の大変さを聞き取った。病院はどうなっているのだろう。火の勢いがゆるんできたので長男に車の運転を頼み、病院へ急いだ。

信号機は消え、道路は陥没し、大きなビルや家々が倒壊し、毛布をかぶって人々が放心したように歩いていた。廃墟さを漂わせた異様な光景であった。病院へ足を一步踏み入れるや想像以上の重大さに胸が高鳴った。

すぐに処置室へ行き、そのまま救護に加わった。次々に負傷者が搬入されたが、ほとんどの人が息絶えていた。5才位の女の子が父親に抱かれ運び込まれた。必死に胸を押した、挿管を試みられたが、やはり息絶えていた。父親は娘の胸を押している私の首にしがみつき「何とか助けてほしい」と必死に泣き叫び続ける、医師もつらそうであった。私は父親の手を握りしめながら「ごめんなさい」と口の中でつぶやき涙が流れて止まらなかった。

遺体を2階へ何度も運んだ、2階へ上る狭く暗い階段で取材をしているカメラマンがライト

を付けカメラを向けた。母親の遺体を抱えていた息子がカメラマンに「やめろ」と怒鳴った。カメラマンはカメラを置き一礼し、その遺体を運ぶのを手伝ってくれた。カメラマンもつらい取材だったことだろう。

1階も2階も所狭しと負傷者が横たわっている。内視鏡室もすでにいっぱいである。急いでMR室のベッドを整理する。懐中電灯を壁に貼りつけ、そこに負傷者を入れた。放射線科の窓ガラスは割れ、外からの冷たい風が容赦なく入ってくる。毛布、タオルケットをかき集める、付添っていた高校生らしき男性がダンボールを使って上手に冷たい風をさえぎってくれた。

「水が飲みたい」「おしっこがしたい」「痛い」「苦しい」とあえいでいる。精製水、蒸留水を紙コップに渡し、一息ついてもらい、女性達にはバルンを入れ男性にはビニール袋をあてがった。小学1年生くらいの火傷の男の子は痛い痛いと言き叫ぶ、座薬を入れるとしばらくしてスヤスヤと眠りだした。床に寝かせていた男性の尿袋を取り替えると血尿であった、血圧も70と低い、外科の医師に急ぎ診てもらい点滴を確保し、転送の手配をしている救急窓口に“至急転送”の旨、連絡を入れる。

転送が次第に軌道に乗り内視鏡室、MR室の負傷者も次々と玄関へベッドを動かすことができた。次いで1階にいる負傷者を皆と協力し、転送の漏れがないか隅々まで確認してまわった。うす暗く水浸しの騒然とした外来で、皆自分の持ち場を分担し必死に動きまわっていた。お互いに声をかけ合い、無事を確認し合い、励まし合った。時間がどのようにして過ぎたのかわからない。ただ暗くなる前に電気が回復してほしいと願った。

暗くデコボコの道を歩いて家に帰る。21時を少し過ぎていた。友人達がかけつけてくれており、差し入れのおにぎりとお茶がとてもおいしかった。

あの日からちょうど40日目を迎えた。余震の回数も次第に少なくなり、またその規模も少し

ずつ弱まっているように思える。水や電気やガスといったいわゆるライフラインの修復もだんだんと進み、我が家も昨日から都市ガスが復旧した。しかし、なお多くの地域で水道の復旧もままならない状態がある。更に住宅を失った人々の当面の住まいの問題も遅々として進んでいない現実がある。死者の数も昨日新たに5名増え、5431人、兵庫県内だけで5,412人となった。

これまで自分自身で歩いた被災地域の惨状にただただ圧倒されつつ、死者、行方不明、家屋の倒壊〇〇万戸という統計的な数字ではなく、そこにあった1つ1つの人間の生活、人間の営みに想いを馳せる。

一方、復興への足取りも少しずつであるが確実さを増しているように感じられる。太平洋戦争末期の神戸大空襲で阪神・神戸の街が灰塵に帰してからちょうど50年、節目の年に第2の復興を始めねばならない歴史の皮肉という事についても考えさせられる。戦後50年の復興への歩みが何であったのか、またこれからなすべき事が復興なのか、新しい創造なのかという事が問われているし、また私達1人1人が歩んできた戦後50年の歩みと、私達自身の意識自体が問い直されているのではないかとも思う。

搬送依頼、電話の対応で翌日昼まで離れられなかった

手術室 蒲谷美喜

我が家は西市民の隣に位置するところにある。日頃より西市民前では交通事故があったりで、あの1月17日も前兆の海鳴り様の物音は知らずに眠っていましたが、ドーンという大きな音に、どれだけ大きな車がこの建物にぶつかったんだろうという思いで、枕元に座ったのを覚えています。その気持ちの中には、野次馬根性で見に出なくてはという思いがあったのではと思います。座ったと同時に縦揺れがあり、11階に住んでいたのだからジェットコースターで揺られている様でした。数秒後の横揺れではベラン

グ側よりすべり落ちるのではないか、死ぬのだろうなと一瞬にして色々な思いが頭をよぎったように思います。揺れがおさまってからは、外に出た方がよいのか家にいた方がいいのか分からず周囲に合わせようと、先ずドアに向かいました。ドアは割れたのか開かず、隣家の助けもありベランダづたいに地上まで逃げられた時はホッとしました。

真っ暗な中での物音では何もかもが落ち、割れているのが感じられるのですが、その中での脱出でも家族全員ケガなく生きのびることができました。早々に病院に出務し救援活動をとほ思ったが、地震の恐怖でふるえている子供2人を残しては動くこともできず、明るくなるのを待って近所に住む姉（無事だった）に2人を預け、8時前に病院に出ました。

明るくなって周囲の惨状に啞然としていたのに、それにも増して病院入口からの被災者の状況には地獄を見ているようでした。すぐに亡くなった方を安置所としているリハビリ室に搬送したり、安置できなくなったら2階の会議室、内科外来と整理し安置場所の確保、搬送と何往復もしました。その間には、下敷きになった人が次々に運ばれ、玄関先での心マッサージ、挿管介助、骨折しているだろうが何の処置もされず、横になっている人達の症状の聞き取り、転送の依頼等その場その場の対応に追われていました。安置所への搬送も一段落ついてからは外科外来にて創傷処置介助、また予備電気が消えてからは暗闇に横になっている人への声かけ、排泄の確認などフツと息つく間もなく動き回っていました。

入院の必要な方達を救急窓口に依頼に行っても、次から次の依頼で対応できる人が不足しており、14~15時頃からは受付で搬送依頼、輸送車の手配、電話の対応と一時のつもりが離れられなくなり、結局は翌日の昼までそこで対応していました。

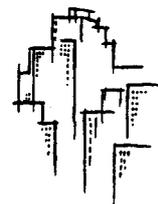
夜間になってからは家族、親類者探しの方達の対応と、1日半がアッという間に過ぎた状態

でした。すれちがい程度でのスタッフへの声かけだけで、スタッフの把握までは十分に配慮できていませんが、自分の持てる力の限りでは精一杯の活動だったのではないかと思います。数日後、何もできていないじゃないというお叱りを受け、情けない思いで落ち込みましたが、誰に何と言われても自分の出来ることを今現在もしているんだと自分を励まし、1月20日より西神戸医療センターで働いています。

皆、それぞれの場で大変な思いで活動していると思います、又今後どうなるかの不安も日に日に大きくふくらんでいるものと思います。現状の様子を文章でも確認できたら、少しは気持ちも違うと思います、特に西市民より外に出ている人達はどうなるの？との問いも「何も分かってない」「決まってない」だけの一言で、『変なこと言うんじゃない』『黙っていなさい』だけでは済まされないのではないのでしょうか。そのような場を目にするたびに、このような状態だから言葉に気をつけなくてはと感じるのですが…。精神的フォローの必要は、今あまりにもひどいなと感じる場面に遭遇しています。

1月17日の状況をとのテーマに対し、必要な事まで書いてしまいました。疲労や体力の限界ぎりぎりという皆の顔ですが、でもこちらの皆も頑張っています。2月15日のニュースでは、『西市民病院・平成10年完成再建』とか、そこで又一緒に働くという希望で頑張ろうね、と話しています。皆様も大変な御苦労と思いますが、身体に気を付けて頑張ってください。

〔西神戸医療センターにて：2月16日深夜勤中、ちょっと時間的余裕があったので思いつくままに書いてみました。〕



抹殺したいあの日の記憶

内科部長 郡山健治

今度の事は僕もとても辛いんだ。僕の皮膚には生まれつき病気があるんだ。体の中で何かか蠢くと、皮膚に痙攣が起るのだ。色んな医者がいつ、体のどの部分でその発作が起こるのか調べているのだけれど、まだよく分からないらしい。

手にはこの痙攣が今まで殆どなかったから、阪神間の人達は掌の片隅で幸せに暮らして来たんだ。楽しそうに日々を送っている神戸っ子達を見ると自分でも笑みを浮かべているのが分かるぐらいだった。今度の痙攣はかなりひどかったのだから、特に大好きな長田の人達には、辛い思いや悲しい出来事に合わせてしまった。それにあろうことか、病院までいくつか壊してしまった。僕だって本当、泣きたい思いをしているんだ。 —テラ氏の嘆き—

1月16日は朝から当直だった。当直医は外科が山本先生、内科は内藤、高田先生と僕の3人だった。夜0時過ぎに来た発作性頻拍の女性の脈拍がなかなか良くなり、終わったのは3時過ぎ。疲れ切って南館2階の当直室のベッドに横たわり熟睡に入りかけた頃だろう、いきなりベッドがジェットコースターになり、部屋も大揺れに揺れた。建物が倒れてこのまま死ぬと思った。しかしロッカーも倒れず怪我もなかった。横にずれてしまったベッドの下から靴を捜し出し部屋を出た。当直室の前にある僕達の部屋を見ると、ようやく整理が済んだばかりの本箱は崩れ落ちて、本や書類が目茶苦茶に散らばっている。隣部屋からは、「凄かったですねえ」とかなりのんびりした口調の山本先生の声があったが、小心者の僕はそこまでは落ち着いていられず、何が起っているのか心配ですぐ救急外来室へ向かった。

救急事務室に入り野津氏に聞くと、4階・6階病棟には連絡がついて、多分患者達も大丈夫だが、5階には電話が通じないとギョロ眼を据えたまま、蒼白の面持ちで言う。慌てて5階ま

で駆け上がったが、4から5階への階段にはコンクリートの塊が岩のようにゴロゴロ落ちていて昇れない。「おーい、大丈夫か」と声を掛けても何の返事も無い。この時、事態の重大さを実感した。4階に降りて、看護婦さんに患者さん達と1階に避難するよう指示して、下に戻ると（その頃にはすでに電気は切れて、非常灯だけになっていたと思う）、救急室には怪我人が、死にかけの人が次々と来て無理矢理処置をせざるを得ない状況に追いやられた。薄暗い救急処置室で、看護婦さんがひっくり返ったいくつかの処置台を確保し、あちこちに散乱した消毒液や縫合セットを何とか揃えてくれ、縫合作業が始まった。内藤先生も来てくれたが、5西の人達はやはり安否が分からないと言う。暗澹とした気持ちのまま、駆けつけてくれた高田先生と3人で、手足を切った人や頭皮がザクロのように裂けた人をイソジンで消毒（もちろん麻酔をしている暇はない）だけして縫合するという単純作業。腕の動脈が切れて血が噴き出している人は、縛って置いて山本先生の来室を待った。

何人かの子供や老人を診たが、殆ど窒息死もしくはその寸前で助かる見込みはなさそうだった。古谷、佐藤、喜多嶋A先生も来てくれ、縫合や次々と運ばれて来るそんな死にかけの人の蘇生を、包まれた毛布のまま床の上でしてくれていた。「何とかしてくれ!」「まだ温かいから診てくれ!」そんな絶叫が暗がりの中から聞かれた。野戦病院以下の状況で、地獄絵、阿鼻叫喚の世界といった様相。悪夢なら早く覚めてほしいと、空しい願いが何度も胸をよぎる。

30人程処置をした頃だろうか、総婦長が来て死亡診断書を書いてほしいと頼まれた。時計を見ると9時半過ぎ。部屋からワイシャツのまま飛び出したし、エアコンは切れたままだから寒くて仕方がない。白衣を着て来ると断り、怪我人でごった返している廊下を歩いて外に出た。所々大きく盛り上がった路上には沢山の人がゾロゾロ歩いている。辺りの家は倒れ、遠くない所からは黒く煙が立ち込めている。振り

返って本館を見上げると5階が押し潰されている。受け持っている患者さんや、看護婦さんの姿が目蓋に浮かぶ。「どうしようもない…」そんな思いが体中からにじみ出すのを感じながら部屋に戻った。倒れて歪んだロッカーからセーターを取り出し、血の飛び散ったワイシャツの上に着込み白衣を着けた。気分を落ち着けようと煙草を吸うが、口はカラカラで味もしない。

すっかり重くなってしまった足を引きずり、今は安置所になり変わった内科外来へ向かった。空腹だし、ガラスが飛び散った窓からは冷たい北風が吹き込んでくるので診断書を書こうとするが寒さで指が動かない。この時感じた異常な寒さにショックも多分に加わっていただろう。看護婦の藤井さんにパンと牛乳を貰ってから、1人1人の死亡確認（この時初めて大震災が5時46分だったと知った）から始めた。土の匂いがする布団に横たわった死人には外傷は殆どない。衣類や顔に付着した壁土らしい汚れさえなければ、大混乱で疲れ果て今は深い眠りに陥ちていると言われても納得できそうな、そんな死に方だ。駆けつけてくれた医師達があんなに一生懸命してくれたのに、結局救命には至らなかったという空しい確認しか自分を満足させるものはない。

診断書に再び向かったが、腰掛けた椅子のすぐ後ろには診療ベッドの上に小さい形に布団が被され、横には母親らしい女性がまんじりともせず座っている。遺体を背に仕事をするのは辛すぎると思っても、他に安置場所もありそうにもない。20枚程書いてようやく済んだと思ったら、看護婦の藤井さんがまだだと言う。後ろについて真っ暗な部屋（それがどこの部屋だったか未だに解らない）に入った。懐中電灯の光を頼りに眼を凝らすと、折り畳み机と思われる台をを並べた上に15体程も見える。1階ではリハビリ室も安置所になっていると聞いていたから、一体何人運ばれて来たのか見当もつかず呆然となる。

応援を求めため医局へ行くと、数人の同僚

らの口振りから、被害は長田周辺だけでなく東部の方がむしろ大きいことを知った。恐る恐る聞いてみると、5階の人達は閉じ込められているがどうやら無事らしい。居合わせた河野先生に残りの診断書作成を頼んでから、自然と足は当直室に向かった。

事が始まった原点に戻り、何をどう考えれば良いのか確かめたかったためだろう。しかし、痺れ切った頭では考えの糸口さえ分からない。長過ぎた空しい仕事がどうやら済みつつあるという解放感と、5階の人々は無事だろうという僅かな安堵感だけが、すっかり鉛になってしまった体に一度に広がって、ずれたままの冷え切ったベッドに横たわると、そのまま眼が閉じてしまった。

この日書かれた死亡診断書は67枚にもなっていたことは後日聞いた。

あの日の事

手術室 日高美香

私達3人は7時50分に貴重品だけ持って寮を出た。寮の向かいの靴工場は横の駐車場に滑り落ち、下敷きになった車が己の存在を知らせるかの様にクラクションを鳴らし続けていた。女の人と男の人が半狂乱になって潰れた家の前にいた。「西代から歩いて行こう。」西代方向へ歩き始めると1階部分が潰されているビルが続いている。周囲にはガスの臭いが立ち込めている。「とんでもない事が神戸で起こっている。」肌がそう感じた。しかし（今もそうだが）不思議と恐怖心はなかった。

途中は煙の臭いが立ち込め、あちこちで火の手が上がっている。しかし消防車が放水するにも水がなく川から給水していた。「病院なら大丈夫だろう。」「病院は潰れてないだろう。」私達3人はのんきな事を話しながら病院へと急いでいた。

病院に一步入ると、そこは野戦病院の様だった。叫び声と怒鳴り声と人々が激しく出入りす

る音で、1階フロアー全てがウワーンというなり声を上げていた。鳥肌が立った。救急外来室内へ人をかき分けながら入り婦長に到着を告げると、「OP着に着替えて来なさい！」と言われ4階まで駆け上がった。

OP室患者用出入口が開放してあり中は水浸し、手洗いの機器のふたは全て開き、整然としていたセミクリーンホール・洗浄室・ナースステーション・各手術室・そしてナースラウンジの棚や器械全てが地にひれ伏していた。倒れているロッカーからOP着を引っぱり出して着替え、手に持てるだけの滅菌ゴム手を持って下へ降りた。下へ降りたのはいいけれど、どこで何をすれば良いのかわからず指揮を貰うにも貰える状態ではなかった。「自分で見つける。」ゴム手をはめ周囲を見渡した。「何が今、必要か?」「何をすればいいのか?」気付くと私は、1人の男性の挿管介助と同時に心臓マッサージを始めていた。その男性は16、7才の人で友人宅に泊まりに来ていた所、家の下敷きになったとの事、友人の両親がDrに「助けて下さい。」とすがりついていた。「この人は、だめかも知れない。」そんなあきらめにも似た気持ちがちらっと頭をよぎった。ボスミン心注もした。その時出来る全ての救命処置をした。彼の半開きに開いた眼は虚ろに空間に向けられ、顔もすすで黒くなり皮膚も冷たく、四肢全体にチアノーゼが出現しており生命徴候は一切出て来なかった。「実の両親が処置を受けに来ているらしい。」と情報を得た私と同僚は、もう1人の先輩NSと3人で交替しながら彼の両親を探した。「Aさんの御家族の方、いらっしゃいませんか!」肉親が来た所で抜管処置終了とする為にも必死で探した。結局、両親は見つからなかった。「御臨終です。」30分位心臓マッサージ、アンビューをмонでいただろうか、Drが宣告をした。彼の友人の両親は泣き崩れた。他人の子供が自分の家の下敷きになって圧死し、自分達家族は無事だった、それをどう彼の両親に伝えるのか、彼の死を。

そんな考えもすぐ現実に引き戻された。「2

階会議室へ」毛布で彼を包み2階へ上がった。そこには厳粛に死を受け止めることや、家族への配慮などは吹き飛んでいた。死は死として受け止めていたが、それ以上にこの中で消えそうになっている生命の火をいかに燃やし続けさせることが出来るか、それが大きなウエイトを占めていた。

救急へ戻ると「小児用の挿管チューブが足りない!」大人だけでなく小さな子供も家の下敷きになり運ばれて来る。Dr 1人にNSが1~2人ついているので人員は足りている。しかし運ばれて来る人がそれ以上になっている。フロアー内を移動するのも難しくなっている。「今、自分がすべき事、滅菌物の補充。」OP室へ駆け上がり、気管チューブを取ろうとする。しかしチューブ類が入った棚は倒れた衝撃で戸が開かない。近くにあった棒で戸のガラスを叩き割り、気管チューブ、喉頭鏡を出した。気管チューブを届け再度OP室へ戻り、今度はクリーンホールへと廻った。自動ドアを開け中へ入るとクリーンホールも棚が倒れ足の踏み場もなく、脳外、整形用の精密機械が備え付けの棚のガラス戸を突き破って落ちていた。ガラスの破片に注意しながら、ナイロン糸、持針器等を拾い集め下へ降りた。

「5西へ上がってくれる?」主任に言われた。理由を尋ねると「5西が潰れちゃったのよ。」

「!」階段を駆け上がり4西から非常階段を上がり、工事中のフロアーに出た。コンクリートの天井が低く下がり、身をかがめて歩かなくてはいけなかった。ヘルメットを被り患者が救出出来るだろうと言われる唯一の穴の前に他のNSと共に座った。そこから見る景色は誰かが上から踏み倒した様になった建物が続いているものであった。半袖のOP着で必死になっていたが、この時になって初めて寒さを感じた。「レスキュー隊を頼まないは無理」か「レスキュー隊を待っている」であった為、私達OP室の1年生は「救急を手助けして。」と言われ下へ降りた。突然、非常電灯が切れ真っ暗になった。処置物品

一切を正面玄関へ運び、そこで処置を再開。消防のレスキュー隊の方々が到着し上へと上がって行った。陽は傾き始めた。正面玄関に西日が一瞬入ったがだんだんと夕闇が迫り出した。ナートをするにも懐中電灯の弱い光と持針器が無いので鑷子を頼りにする様になり、だんだんと寒さも強くなり始め、情けなくなった。その間にも村野工業への搬送が始まり、真っ暗の廊下、CT室等で休んでいる患者の状態観察をするため、懐中電灯を持ち走り回った。その時パッと電気が付いた。あまりの嬉しさに横に居た同僚と手を取り合った。

それから入院患者、廊下で休んでもらっている患者の搬送が本格的に始まった。その間に家へ電話を掛け無事を知らせ、長田区で独り暮らしをしている祖母の安否を尋ねた。電話が通じないから車で様子を見に行くと両親は心配していたが、私はきっと祖母は大丈夫と信じていた。機器類の後始末、救急室内の整頓、時折搬入される患者の処置、介助を行い、ふと時計を見ると23時だった。この日の夜は1台のラジオに耳を傾け机にうっ伏して休んだ。むろん眠るなんてことは出来ず、体はだるく目は閉じているが頭だけは冴え渡り、耳は絶えずラジオからの情報を捉えていた。余震が何回も起こったが皆と居るためか危険と思いつつも恐怖心はなかった。

次の日の昼、当日来れなかったNSが続々と顔を見せ始め再会の喜びに浸った。それからOP室を閉鎖するかも知れないので荷物を引き上げる様に、また休む様だと言われCT室へ移動するがCT室も危険という事で検査室へ移動した。その間に寮へ戻り、免状・アルバム・自分にとって大切な物をリュック一杯に詰め込み帰って来た。現在は長田区の祖母宅へ身を寄せ、神戸市役所1階救護所に出務している。



支援物資・救援物資も昼夜を問わず続々と届いた

副院長 松村陽右

1月17日早朝より、病院玄関は、救急入口の1カ所のみとなった。

地震の発生とともに、入院患者の安否を気遣って駆けつけた人達や職員が通過し、続いて負傷者が単独で、あるいは種々雑多な搬送手段で運び込まれた。救急受付は、病院内の総合統括室となった。入院患者の処遇、救急患者の治療状況が伝えられ、整理されていった。看護部は、転送を必要とする患者数と重症度を整理し、引き受け可能な病院へ連絡するとともに、車輛の手配に懸命であった。入院患者への問い合わせなどで、電話は受話器を置く暇もなかった。

玄関は混乱が続いた。2台の公衆電話に並ぶ人々も通路を塞いだ。目の前を往来する人々の慌ただしさに、転送用車輛を待っている患者も落ち着かず、フラフラと人の流れについて行き、その後を追う看護婦をイライラさせた。

支援物資・救援物資も昼夜を問わず続々と届いた。食料品・医薬品・衣類・飲料水と様々であった。どれだけの物が必要かではなく、何が必要かを判断して、何時間かかるかも知れない道程を走り続けた人々の善意に感謝する。病院前をデイバッグを背に歩いていた人から、オニギリやミカンを頂いたこともある。足りているからと辞退しても、人の役に立つことはこれしかない、といった善意を有難く受け取った。生活物資として、最も必要なものは水である。水を確保することも受け身であり、届けられるのを待つしかない。待つ準備を万全にし、千載一偶の給水機会を逃さないようにしなければならなかった。三菱重工ドッグに入港中の潜水艦「せとしお」の乗組員が配水してくれるようになってからは心強かった。電話連絡により、即座に届けてくれることになった。自分達に出来ることはこれだ、と判断した艦長の指示であるとのことだった。海難時に助け合うことを常識としている、海の男達の心に感謝した。

玄関口には、報道陣も続々と到来した。5階

病棟が崩壊した市立病院として、ニュースバリューは充分であった。事実を事実として、正確に伝えること、形容詞・副詞は出来るだけ使用しないよう心掛けて対応し、報道にもそれを求めた。報道の趣旨を質し、誤解を招かないよう、本来の西市民病院の機能・構造を説明したのち、被害状況と現状を伝えた。

報道陣の中には、韓国・台湾・シンガポール・アメリカ等の外国勢も含まれていた。圧死者が、1名にとどまった事実に一様に感嘆してい

た。村山総理、土井衆議院議長をはじめ、要人の視察に付随する報道陣には困惑した。折角の機会を単に“そのとき”の顔写真を撮るだけの目的で取り囲み、説明者の行動を阻害した。

玄関先には、仮設トイレも設置された。清潔に保ち、手洗い用の水を補給することにも、気配りが必要であった。

病院の評価は、玄関から始まり、期待通りの結果が得られた人達は、感謝の一礼で玄関を出る。このことは、震災の前も後も変わらない。



長田区が燃えている

生死は地震直後に決まった

医療最前線

神戸市立西市民病院

1月17日
(西市民病院にて)

医師の証
地震の時は仮眠していた。当直室の上が外科病棟になっており、病棟を見て回った。そのときはパニックというような状態ではなかった。しばらくして救急外来から静養の依頼があった。下りてみると患者の列ができていた。ほとんどが縫合処置を必要とする患者ばかり。次から次へと患者がやってきました。

あまりに多くの患者に縫合のセットはすぐになくなり、カルテは全くなくなりました。受付でも患者の名前を記録できるような状態ではなかった。患者が列をなして救急の

神戸市立西市民病院 部屋のなかで待っている状態だった。動脈の出血を止めているものがあった。深々糸をかけることにより、とりあえず止血するしかなかった。縫合処置は午前中ずっと続いた。家が倒壊してやめて来た患者が避難して廊下に寝ている状態だった。

入院患者は崩れた五階のある本館から、新館の方へ避難させ、なるべく搬送するという方針をとった。骨折の患者は整形外科のドクターにお願した。地震の時にはびっくりと生死が決まってしまう例が多く、連れてこられた患者の多くは既に死亡していることが明らかになった。

死亡して運ばれてきた患者は覚えていない。レントゲン、超音波検査、採血検査など地震直後はできなかった。地震からしばらくして、(午前七時ごろだったか)電気がいったん回復したが、その後再び停電となった。水は出なかった。

5階が崩れ落ちた神戸市立西市民病院の旧館(神戸市長田区)



懐中電灯頼り… 懸命の縫合手術

看護婦、7時間生き埋め 救出されると同時に患者救出

段が途中で切れてぶらぶらしている。上がるとかできないので諦め、工事中だった非常階段を上った。全階裏側は工事だった。真っ暗な中、西階へ近づいていく。段々天井が低くなっていき、これ以上すすめなうなため、おぼろめ

てひきかえた。救急のある階へ行く。電気が消えて、天井からは水が漏れ、階段は足の踏み場もないような状態だった。しばらくして、外来へ患者が押し寄せた。真我の人がほとんど。真我の状況で懐中電灯の明かりのなかで縫合をした。水がでなくなるとしてひきかえた。救急のある階へ行く。電気が消えて、天井からは水が漏れ、階段は足の踏み場もないような状態だった。しばらくして、外来へ患者が押し寄せた。真我の人がほとんど。真我の状況で懐中電灯の明かりのなかで縫合をした。

なかつた。その間にもほとんど患者がやってきた。しばらくすると近所に住む医師たちが駆け付けてきてくれた。あまりの患者の多さに、救急だけでは対応できなくなりました。旧館の一階の外来を借りて対応していた。レスピレーターをつけた患者が二人いた。一人はもちろんだが、一人はひどく痛めた。震の末期の人でぶれた病棟にいた一人だ。

傷の手当てをしていっても次から次へと患者が運ばれてくる。明らかに死亡してからの時間がたっているのに処置をして欲しいと要求される。外来患者の搬送が必要な人を取りアップした。その辺に患者があふれ、どこに誰が寝ているかわからない状態だった。横になれぬころはすべて横になつてもうた。入院患者は下へ降りてきた。六階より上の患者は切れてしまつた階段に板を渡して下りてきた。五

階の西からは人が一人通れるか通れないかの隙間しかなかった。夕方から死んだ人の身元確認をし、死亡診断書を書いた。最初の犠牲者で七十体の遺体を運ば安葬所へ移した。検査室は作成部門のドクターを決めてその人にすつと置いてもらった。まどめて安んじた。人は二階に降りた。起き上がった人は地震の揺れのためにベッドから放り出されて助かった。部屋の机が倒れにあって、電話やナースコールを使って話をしようとしたがだめだった。止血器を使ってこちらの安否をたずねる声が聞こえていたが、こちらからの声が届かなかった。すぐ上層で患者の声や足音がある。六階の床がすぐ上にきていることを知った。大層な「助けろ」と声が聞こえてきた。七時間前にスプリンクラーが作動した。一瞬水が出た。八時過ぎごろ空響機が動いたが、すぐ止まった。

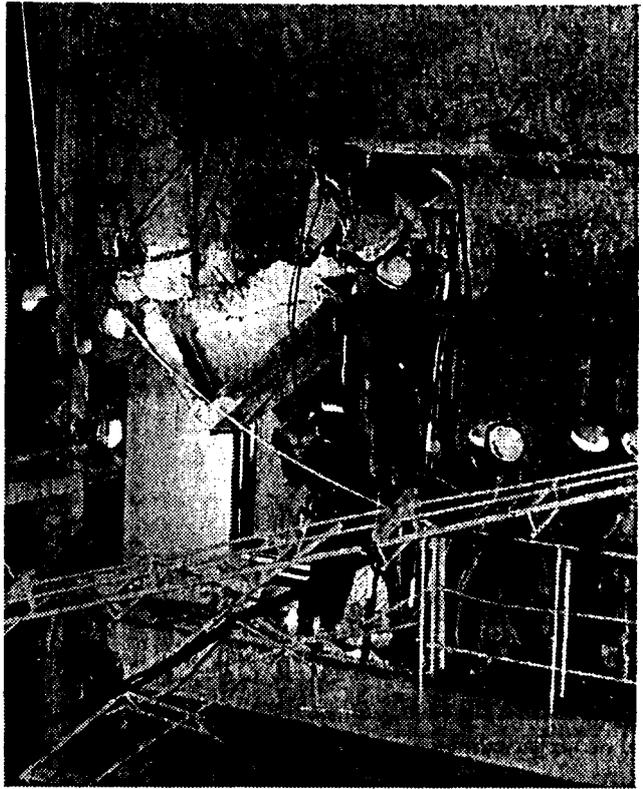
午後一時頃内科病棟のドクターを含めた病院関係者ががれきの山をかき分けて助けに来てくれた。助けられたと喜んだその病棟に三分の二ぐらいの患者が残った。少し休んだ後、自ら患者の救出の手伝いをした。その晩は病院で仮眠した。家のものと連絡がとれない患者と、いっしょから外へ出ることができない。手術室の硬い廊下の

「がんばりましょう」呼びかける声が聞こえた。それが聞こえなかった。そう思うしかなかった。どのくらい時間がたったのだろうか。真っ暗でもわからない。ペンライトの明かりを頼りに時計を見た。患者のベッドの横の上には天井が引っかかって止まった。ベッドから起き上がった人は地震の揺れのためにベッドから放り出されて助かった。部屋の机が倒れにあって、電話やナースコールを使って話をしようとしたがだめだった。止血器を使ってこちらの安否をたずねる声が聞こえていたが、こちらからの声が届かなかった。すぐ上層で患者の声や足音がある。六階の床がすぐ上にきていることを知った。大層な「助けろ」と声が聞こえてきた。七時間前にスプリンクラーが作動した。一瞬水が出た。八時過ぎごろ空響機が動いたが、すぐ止まった。

午後一時頃内科病棟のドクターを含めた病院関係者ががれきの山をかき分けて助けに来てくれた。助けられたと喜んだその病棟に三分の二ぐらいの患者が残った。少し休んだ後、自ら患者の救出の手伝いをした。その晩は病院で仮眠した。家のものと連絡がとれない患者と、いっしょから外へ出ることができない。手術室の硬い廊下の

阪神大震災 読者の体験手記

阪神大震災で5500人近くの方が犠牲になり、いまなお多くの被災者が避難所生活を強いられています。この震災を記録する作業の一つとして、読者の体験手記を募ったところ、多くの投稿があり、震災2カ月特集(17日付)でその一部を掲載しました。引き続きこの欄で紹介いたします。



壊れた神戸市立西市民病院から救出される入院患者＝1月17日、神戸市長田区で

動けない、寒い、ガス臭い 西市民病院の暗闇の中

神戸市兵庫区 主婦 伊藤 信子(52)

一月九日夜、自宅で脳出血の症状が出て近くの神戸市立西市民病院に入院してしました。

「ドーン、ガタガタ。病室

のベッドはトランポリンのよ

うに弾み、私の体は何回も小

刻みに宙に浮く。地震だ。早

く下りなければ」と思うと同

時に、たたきつけられがれき

の上に座っていた。粉っぽい

土壁がごんもりと山のように

なっている。この土たろう。真っ暗で何も見えない。物音もしない。静かだ。階下の病室から、時折泣き声がする。すぐそばになった。ベッドの上のラジオを探すが、がれきの山だ。布団もない。立ちどすると頭が何かにつか

える。上を見ると天井が落ちて

いる。ベッドの手すりも支

えなくなって止まっていた。

隣の鶴田さんに、「いまの

ラジオがあったことを思い

出す、食台の中を必死でかき

出す。スイッチを入れた。N

HKだ。一瞬の外の明かりは

まはらですが、何も見えませ

ん。静かです。町は静かだ

す」と繰り返す。「震度？」

「被害？」を聞きかかった

が、「神戸の震度は分かりま

せん」と、心細い限りだ。も

し助けにきてくれたら返事を

せねばと、ポリウムを上

げたり下げたりしながら聞
く。
少し落ち着いてきた。病室
の隅に一つだけ蛍光灯がつい
ている。その明かりが木漏れ
目のようだ。うすうすと病室
の様子に分かる。無数の配線
が垂れ下がり、折れ曲がった
カーテンレール。隣室との境
の壁が筒抜けだ。もしこれで
火災でも起きたらと思うと生
きた心地がしない。
とれくらい時間がたったの
か。消防車と救急車のサイレ
ンがやむことなく聞こえる。
閉じ込められているのにだれ
も気づいてくれないのか。
「ヘリコプターの音がうる
さい。」「静かにしてくれない
と外からの救助の声が聞こえ
ないじゃないか」。腹が立
つ、憤けない。
暖房も切れ寒い。突然ガス
臭い。スプリンクラーから流
れる水が、鶴田さんの布団の
中に染みてきて、「冷たい」
と声がする。二人で声を掛け
合い隣の病室の患者とも動ま
り合う。ヘリコプターの音が

増してゆく。「あめい」

十六日の朝にやっと点滴が

終わり、百五十六時間ぶりに

腕が自由になった。一日も早

く退院し、元の生活に戻りた

いと思った直後の出来事だ。

娘二人のことが心配だ。何と

かならないかと気が焦るが身

動きできない。八時をたく

に過ぎていくというのに、日

が入ってこない。

突然、頭の上でバタバタと

足音がした。何人も人が行

き来る様子。助けにきてく

れたのだろうか。ありがたい

と思ったのもつかの間、元の

静けさになり物音ひとつしな

くなかった。しゃがんだままの

姿勢で腰と肩が痛む。

人の気配がする。「だれか

いるか」「大丈夫か」。男性

の声だ。隣室の患者と一緒に

大きな声で、「ハイ！みんな

大丈夫です」と返事をすると、壁を壊す音や金属を切断

する音が聞こえる。「今行く

から待っててよ」と救助の

声。その度に「ハイ」とみ

んなで返事をすると、

やっと出られるほどの穴を

開けてもらいマットのうえに

出る。マットをつなぎ両側に

看護婦さんたちが待っていて

くれた。「立って歩け？

頭を低くして中腰にしないと

コンクリートにあぶつかると

から、玄關に娘さんが見えて

る。後で呼んできます」と

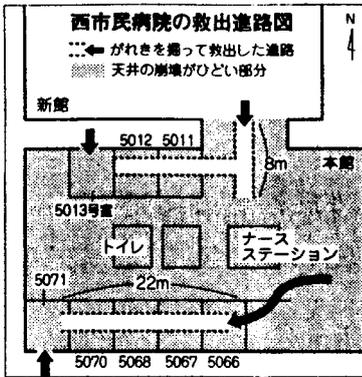
聞いた途端、看護婦さんに奇

り掛かり泣けた。

神戸西市民病院 生き埋め46人救出

生還への16時間

阪神大震災で、病棟の天井が崩れ落ちた神戸市立西市民病院（神戸市長田区一番町二丁目、塩見文俊院長）では、生き埋めになった患者と看護婦計四十七人のうち、亡くなったのは、たまたま廊下を歩いていた患者二人。残る四十六人は救出された。かろうじて生還した人たちは、暗闇（くらやみ）のなかで半日以上も耐えた。打ち続く余震のなか、なぜ天井に押しつぶされなかったのか。五千三百人以上の死者の九割が圧死とされる今回の大震災で、天井を支え続けたのは、ベッドのかみ、鉄棒と食台だった。



神戸市立西市民病院から患者を救出する人たち＝1月17日、神戸市長田区で

中はまるで「洞窟」だった 壁を破り、声を頼りに掘った

神戸市立西市民病院一九九九年に完成し、七年前に増築した七階建ての七階と、九一年完成の五階建ての新館からなる。外科、産婦人科などを持つ市街地西部の中核病院として位置づけられている。震災直後は入院患者三百五十八人、外泊五人と当直の医師、看護婦ら約三十人がいたが、生き埋めになった四十七人以上は避難して無事だった。

西に、がれきを取り除き、壁を破りながら進んだ。神戸市消防局に「西市民病院で百人生き埋めの一報が入ったのは、午前十一時半。救急救助隊の野田三郎救助隊長（あごはサレ）の「洞窟（どうくつ）さうじ」のようだった。

本館の改修工事を請け負っているゼネコンの現場事務所の勤務一所属員は西宮市の自宅、自らも倒れた家具の下敷きになりながら救出し、自宅車で午前十時半ごろ到着した。病院関係者に設計図を見せながら、比較的位置のすい場所を指示。医師や兵隊携帯の機動隊計三十人も応援に現れ、約五時間かかりで五〇六七号室までの約十層を掘られていた穴をほって進

一月十七日午前四時四十分、大きな揺れとともに、東西約七十五メートルにわたる本館五階部分の西三六六室に、約三十七名が居た。午前七時、同病棟のボイラの天井が崩れ落ちた。生一ラ一技士、倉地敏夫さん（三）は、自宅の三木市から進入。天井は二層の高さまで出た。初着の患者が救急搬送された。六階には救急隊の看護婦らが待機し、ロープでつり上げて救出した。

同病棟の放射線技師、薬師三三さん（三）は午前八時〇六分までの約十層を掘られていた穴をほって進

六階から、非常階段越しにベッドに横たわっていた。天井が崩れた五階の一室にペランダのがれきを取り除き、天井は二層の高さまで出た。初着の患者が救急搬送された。六階には救急隊の看護婦らが待機し、ロープでつり上げて救出した。

同病棟の放射線技師、薬師三三さん（三）は午前八時〇六分までの約十層を掘られていた穴をほって進

中から西へ進んだ。穴は五〇二号室の前でふさがっていたが、間隙には五人が挟まっていた。大型ドリルで約十五センチの厚さの壁に直挿し、ジャッキで穴を固定し、コンクリートのがれきを掘り出した。生き埋め患者の声を頼りに約二層掘り、計八人を救出した。

午後三時半に到着した京都府消防局のレスキュー隊六人は、小川明徳隊長（あごはサレ）の指示により、五〇六七号室で止まっていた穴をさらに西に約十層掘り進めた。その先の洞窟にいた七人は足の不自由な高齢の患者が多かったため、毛布の上で一入ひとり乗せて引上げるような格好で、午後九時五十分までに救出した。

迫る天井、ベッドが支えた／闇の中、食料分けあった

【証言①】五〇七〇号室（六人部屋）の浅田千鶴子（あさのちづこ）は、地震発生約十五分前の午前五時半に目覚めた。左足から、背かきようで入院していた。南向き窓際のベッドに正座し、歯ブラシを取らして、その時た気がつく、隣のベッドとの約三十センチの間に上半身逆さまに落ちていた。がれき

【証言②】五〇六六号室（六人部屋）の北前たか子（きたま たかこ）は、心臓弁膜症が回復約七十七歳と、ベッドの足

【証言③】五〇六六号室（六人部屋）の北前たか子（きたま たかこ）は、心臓弁膜症が回復約七十七歳と、ベッドの足

【証言④】五〇六六号室（六人部屋）の北前たか子（きたま たかこ）は、心臓弁膜症が回復約七十七歳と、ベッドの足

【証言⑤】五〇六六号室（六人部屋）の北前たか子（きたま たかこ）は、心臓弁膜症が回復約七十七歳と、ベッドの足

【証言⑥】五〇六六号室（六人部屋）の北前たか子（きたま たかこ）は、心臓弁膜症が回復約七十七歳と、ベッドの足

【証言⑦】五〇六六号室（六人部屋）の北前たか子（きたま たかこ）は、心臓弁膜症が回復約七十七歳と、ベッドの足

【証言⑧】五〇六六号室（六人部屋）の北前たか子（きたま たかこ）は、心臓弁膜症が回復約七十七歳と、ベッドの足

【証言⑨】五〇六六号室（六人部屋）の北前たか子（きたま たかこ）は、心臓弁膜症が回復約七十七歳と、ベッドの足

【証言⑩】五〇六六号室（六人部屋）の北前たか子（きたま たかこ）は、心臓弁膜症が回復約七十七歳と、ベッドの足

編集後記

平成7年1月17日午前5時46分に発生した地震は、約30秒間で西市民病院に壊滅的な打撃を与えた。平成4年に新館、平成5年に南館の竣工をへて、本館改修工事は最終段階に入り、念願の研修指定病院の認可も目前であった。

「平成7年1月17日」を、神戸市立西市民病院の歴史の中で最重要事項として各部署における状況を記録に留めるべく作業を開始したが、当日の混乱した状況の中で職員各自がどのように行動したかを正確に記述することは予想以上に困難であった。懸命に行動し疲れというより、ただ茫然として仮眠を取った夜。ふと目覚めてペンを走らせた方もあったと思われる。文脈の乱れも止むを得ない。

当日、神戸市立看護短大から10余名、近辺の民間病院からも10余名の看護婦さん達をはじめ、院外からの多数の応援、協力をいただき、被災しながらも地域中核病院としての役目を果たすことが出来たことを感謝する。

本誌が単なる記録でなく、西市民病院の再建に些かなりとも貢献することができれば幸甚である。一時的とはいえ病院職員は離散した。「平成7年1月17日」を共に体験した方々の新しい職場での活躍を祈念するとともに、不幸にして5西病棟廊下で圧死された故長尾裕美子氏のご冥福をお祈りし、編集後記とさせていただく。

